

信濃町の埋蔵文化財

平成19年度町内遺跡発掘調査報告書

—大道下遺跡ほか—

2008

長野県

信濃町教育委員会

平成19年度町内遺跡発掘調査報告書

—大道下遺跡ほか—

2 0 0 8

長 野 県

信濃町教育委員会

例 言

1. 本書は平成19年度に実施した長野県上水内郡信濃町における開発事業に伴う試掘調査の報告書である。
2. 調査は国からの補助金交付を受けて信濃町教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆、編集は調査担当者である渡辺哲也がおこなった。編集の補佐を藤田桂子がおこなった。
4. 本調査の遺物、実測図、写真等の資料はすべて信濃町教育委員会に保管されている。出土資料の記号は大久保南遺跡が [07OKM]、東裏遺跡（医師住宅地点）が [07HU]、大道下遺跡が [07OM] である。
5. 調査体制は次のとおりである。

調査主体者 信濃町教育委員会
 事務局 教育長 小林豊雄
 教育次長 静谷一男
 生涯学習係長 丸山茂幸
 調査担当者 生涯学習係 渡辺哲也
 発掘参加者

- (4. 大久保南遺跡) 石田和子、小林八重子、高田昭夫、高橋是清、田村勇、徳永門、東貢、藤田桂子、
 (8. 緑ヶ丘遺跡) 小林八重子、高田昭夫、高橋是清、田村勇、徳永門、藤田桂子、(11. 東裏遺跡・個人住宅地点) 石田和子、小林八重子、高橋是清、田村勇、徳永門、東貢、藤田桂子、山寄啓一、(12. 東裏遺跡・医師住宅地点) 大沢正志、高橋是清、田村勇、徳永門、東貢、深沢政雄、藤田桂子、山寄啓一、
 (17. 大道下遺跡) 高橋是清、田村勇、東貢、深沢政雄、藤田桂子、山寄啓一

※遺跡名の前の数字は図1と表1に対応する。

整理参加者 藤田桂子

6. 大道下遺跡の一部の石器石材について、中村由克氏（野尻湖ナウマンゾウ博物館）から鑑定していただいた。
7. 調査をおこなうにあたり、次の方々には多大なるご協力をいただいた。記してお礼を申し上げる次第である。池田進、大森亨、片山啓治、河東あや、倉島理行、小林賢治、小林やす子、島津和久、田中淳也、徳永博、豊田忠治、松村鉄雄、宮沢尚也、矢野浩二、横川義成、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ、株式会社長野クボタ、信濃町立信越病院、信濃町建設水道課、信越富士通株式会社

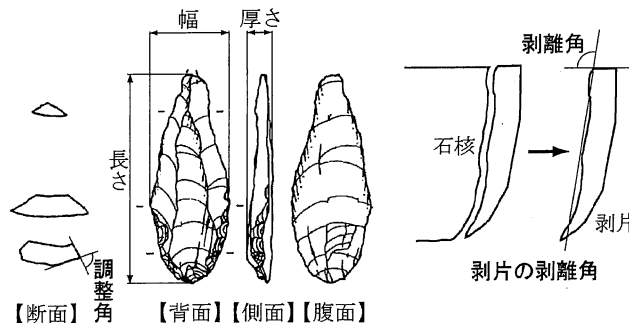
凡 例

1. 出土した石器については器種名及び石材名に対し略号を用いた。本文中に用いた略号は以下の通りである。

略号	器種	略号	器種	略号	器種	略号	器種
NS	抉入石器	RB	二次加工のある石刃	Bl	石刃	Fl	剥片
略号	器種	略号	器種	略号	器種	略号	器種
Co	石核	Ha	敲石	GS	磨石		

略号	石材	略号	石材	略号	石材	略号	石材
Ch	チャート	An	無斑晶質安山岩	Tu	凝灰岩	Ob	黒曜石
TS	凝灰質頁岩	Sa	砂岩	And	安山岩		

2. 石器の計測は下の図のようにおこなった。また、石器を説明する際に用いる用語についても下の図に準じている。



3. 発掘時に移植ゴテ等により付けてしまった新しい剥離面（ガジリ）の部分は、実測図では黒く塗りつぶして表現した。

目 次

I 信濃町の環境と遺跡	1
1. 自然的環境	1
2. 歴史的環境	2
II 調査の内容及び成果	2
1. 照月台遺跡	3
2. 照月台遺跡	3
3. 貫ノ木遺跡	3
4. 大久保南遺跡（2007県道改良地点）	4
5. 東裏遺跡	9
6. 上ノ原遺跡	10
7. 緑ヶ丘遺跡	10
8. 緑ヶ丘遺跡（2007個人住宅地点）	11
9. 長水 A 遺跡	11
10. 東裏遺跡	12
11. 東裏遺跡（2007個人住宅地点）	12
12. 東裏遺跡（2007医師住宅地点）	12
13. 吹野原 B 遺跡	17
14. 吹野原 B 遺跡	18
15. 一里塚遺跡	18
16. 小古間遺跡	19
17. 大道下遺跡（2007工場・店舗地点）	19
18. 御料遺跡	39
19. 御料遺跡	39
写真図版	41

I 信濃町の環境と遺跡

1. 自然的環境

長野県上水内郡信濃町は長野県の北端に位置し、新潟県妙高市と県境を接している。日本海に面した海岸平野の高田平野と、内陸盆地の長野盆地との間にあたり、西には北から妙高、黒姫、飯縄火山、東には斑尾火山がそびえている。これらの火山に挟まれた地域には、標高650～750mの起伏に富んだ高原状の台地が広がっている。

西側の3つの火山では、南に位置する飯縄山が最も古く、12、13万年前には活動を終了している。黒姫山は古期の活動が16から11万年前で、新期の活動がおよそ6万年前に活発になり、3万年前頃には活動が衰えている。妙高山は新期の活動が10万年前頃にはじまり、約6000年前に中央火口丘が形成され、現在に至っている。これら3つの火山の活発な活動により、各火山体の東側一帯には火山灰層が広く厚く分布している。中部更新統の火山灰層は20～30m、上部更新統の火山灰層は10m程である。東側の斑尾山は西側の火山より古く、およそ30万年前には活動を終えていたと考えられている。この斑尾山の西麓に広がる緩やかな起伏の地形を、黒姫火山の崩壊によって生じた池尻川岩屑なだらけ堆積物がせき止めたことにより、およそ7万年前に野尻湖の原形が誕生した。現在の野尻湖は面積が3.96k㎡で、水面の標高が654mである。こうした東西の火山に挟まれて低地帯があり、主に後期更新世から完新世の湖沼・河川堆積物からなる丘陵、段丘、低湿地などが人びとの居住域となっている。

野尻湖の水は池尻川から西へ流れ出し、北へ向きを変えて関川に合流し、日本海へ注ぐ。長野市戸隠を水源とする鳥居川は南東方向へ流れ、千曲川と合流し、信濃川となって日本海へと注ぐ。二つの水系の分水嶺は現在の upper 越自動車道信濃町インターチェンジ付近と考えられるが、この辺りはなだらかな高原状の地形となっている。

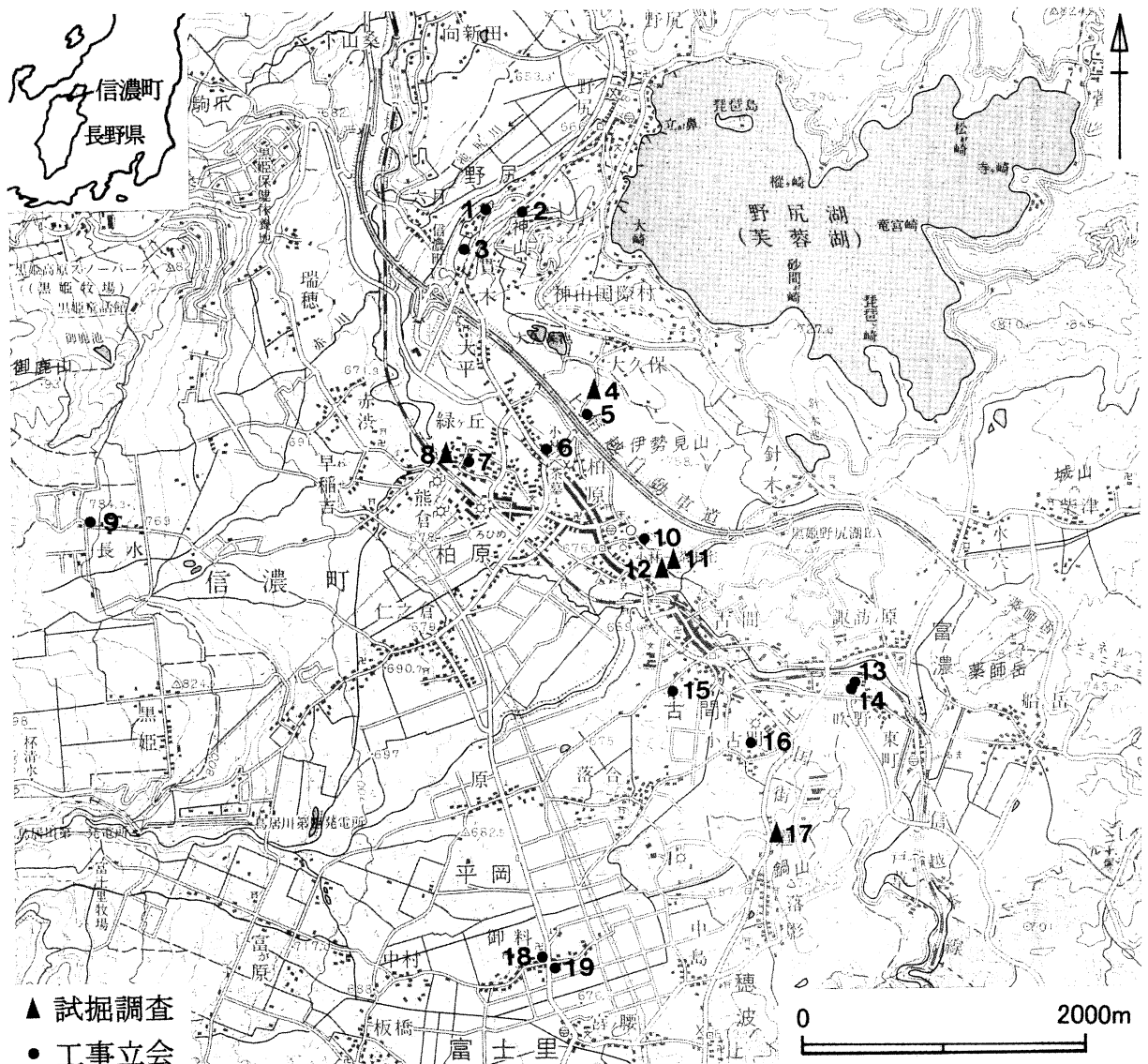


図1 調査地の位置（信濃町役場平成18年7月作成 1/50,000地形図を使用） ※番号は表1に対応

表1 平成19年度に調査した遺跡一覧

No.	遺跡名	よみ	原因	調査方法	調査面積	調査期間	出土点数	発掘届日	終了届日
1	照月台	しょうげつだい	個人住宅建設	立会	(478㎡)	—	—	3/19	
2	照月台	しょうげつだい	個人住宅建設	立会	(450㎡)	9/3	0点	8/27	
3	貫ノ木	かんのき	個人住宅建設	立会	(888㎡)	—	—	5/16	
4	大久保南	おおくぼみなみ	県道拡幅工事	試掘	18.7㎡	9/4~9/12	41点	9/4	9/19
5	東裏	ひがしうら	個人住宅建設	立会	(700㎡)	7/26	0点	7/2	
6	上ノ原	うえのはら	個人住宅建設	立会	(330㎡)	5/22	0点	4/11	
7	緑ヶ丘	みどりがおか	倉庫建設	立会	(20㎡)	11/9	0点	10/29	
8	緑ヶ丘	みどりがおか	個人住宅建設	試掘	6.0㎡	9/3	0点	8/27	9/10
9	長水A	ちょうすいえー	電話アンテナ建設	立会	(1.69㎡)	9/11	0点	4/4	
10	東裏	ひがしうら	個人住宅建設	立会	(120㎡)	7/26	0点	4/24	
11	東裏	ひがしうら	個人住宅建設	試掘	9.6㎡	11/7	0点	11/2	11/14
12	東裏	ひがしうら	個人住宅建設	試掘	37.2㎡	4/25~5/7	68点	4/24	6/8
13	吹野原B	ふきのはらびー	個人住宅建設	立会	(445㎡)	未着工	—	6/20	
14	吹野原B	ふきのはらびー	個人住宅建設	立会	(182㎡)	10/10	0点	9/27	
15	一里塚	いちりづか	個人住宅建設	立会	(298㎡)	4/20	0点	4/4	
16	小古間	こふるま	公道拡幅工事	立会	(581㎡)	10/26	0点	9/7	
17	大道下	おおみちした	工場・店舗建設	試掘	29㎡	5/23~6/4	156点	5/22	6/11
18	御料	ごりょう	個人住宅建設	立会	(150㎡)	5/18	0点	4/24	
19	御料	ごりょう	個人住宅建設	立会	(72㎡)	4/19	0点	4/6	

※調査面積の内、()内の数字は調査対象面積。

現在人々が暮らす居住域は標高700m前後の地域で、日本海側の気候に属し、冬期は寒冷で多雪、夏期は比較的冷涼で、避暑地としても利用されている。

2. 歴史的環境

信濃町は前述のような地形の特徴により、日本海側と内陸部をつなぐ交通の要所にあたるため、古くから人々の往来が盛んであったことがうかがえる。野尻湖西岸の湖底に広がる立が鼻遺跡はおよそ4万年前の狩猟・解体場（キルサイト）と考えられており、ここをナウマンゾウとそれを追う旧石器人が往来したと考えられる。また、野尻湖周辺には旧石器時代～縄文時代草創期の遺跡が40ヶ所あり、その遺跡のまとまりは野尻湖遺跡群と称されている。構成する遺跡はそれぞれ面積が広く、遺物分布の密度も高く、野尻湖の西に連なる丘陵上はとぎれることなく遺跡がつながっているような印象を受ける。近年、上信越自動車道建設や国道18号線の改築工事などにより、長野県埋蔵文化財センターや信濃町教育委員会によって多数の遺跡で広範囲に渡り発掘調査がおこなわれ、膨大な数の遺物が得られている。それらの遺物をもとに近年、野尻湖遺跡群の編年が提示されている（谷，2007）。石器石材や石器製作技術は多様で、そうした石器の内容から、各方面から人々が流入してきたことがうかがえる。

古代では東山道支道が通っていたと推定されている。また、江戸時代には北国街道が整備され、加賀金沢藩の参勤交代や、佐渡からの金銀の運搬など、重要な街道として利用されていた。現在も国道18号線、上信越自動車道、JR信越本線が通り、交通の要所であることには変わりはない。また、関川が信濃と越後の国ごかいであるため、こうした歴史的な地理的条件を備えた地域でもある。中世の山城が多いことも、交通の要所として争奪戦がおこなわれた地であることを物語っている。

信濃町には現在までに173ヶ所の遺跡が知られているが（信濃町教育委員会，2003）、時代により遺跡数の変遷にその特徴が見出せる。①旧石器時代の遺跡が集中する。②縄文時代では草創期、早期の遺跡数が多く、前期以降の遺跡数は少なくなる。特に中期が少ない。③弥生時代、古墳時代の遺跡数は少なく、平安時代になると遺跡数が増加する。

II 調査の内容及び成果

個人住宅建設に伴う発掘調査と、大規模開発に係る試掘調査を対象として事業を実施した結果、平成19年度は19ヶ所の開発行為に対して調査等を実施した（図1、表1）。調査方法の内訳は、試掘調査が5件で、残り14件

原因	個人住宅建設
調査方法	工事立会
調査面積	888㎡ (工事面積)
調査期間	-
出土遺物点数	-

B. 遺跡の環境と調査に至る経緯、調査の結果

貫ノ木遺跡は照月台遺跡から南西側に続く丘陵上に位置する。これまでに多数の発掘調査が実施され、旧石器時代や縄文時代早期などの遺物が多数得られている。これまでにおこなわれた調査は、1985、1988年に野尻湖発掘調査団による学術調査（野尻湖人類考古グループ、1987、1990）、1991、1992年に保養施設建設に伴う発掘調査（渡辺・中村、1992）、1994年に個人住宅建設に伴う発掘調査（信濃町教育委員会、1995）、1993～1995年に上信越自動車道建設に伴う発掘調査（長野県埋蔵文化財センター、2000b）、1994～1996、1999年に国道18号線改築工事に伴う発掘調査（長野県埋蔵文化財センター、2004）などである。

この貫ノ木遺跡内の照月台遺跡に近い別荘地で個人住宅の建設が計画されたため（図2）、現地を確認をおこなったところ、建設予定地は既存の住宅の隣であり、既存の住宅の建設時に斜面を大きく削り、平坦に造成されているところに建設するということがあった。そのため、遺跡が残されていない可能性が高いと判断され、工事立会としたが、事業主との連絡調整の不備により、工事立会未実施のまま、工事がおこなわれたため、遺跡の状況確認はできなかった。

4. 大久保南遺跡（2007県道改良地点）

A. 概要

所在地	信濃町大字柏原216-1、841-1、854-1
原因	県道拡幅工事
調査方法	試掘調査
調査面積	18.7㎡
調査期間	平成19年9月4日～9月12日
出土遺物点数	41点

B. 遺跡の環境と調査に至る経緯

大久保南遺跡は伊勢見山山頂から北西方向へ延びる尾根の延長上にあたる丘陵上に広がる遺跡で、旧石器時代と縄文時代早期の遺跡とされている（信濃町教育委員会、2003）。この遺跡では過去に次の4地点で発掘調査が実施されている。1985年には土取りが原因の発掘調査が実施され（柏原町区誌編集委員会、1988）、1995年には、上信越自動車道建設に伴う発掘調査（長野県埋蔵文化財センター、2000a、2000c）と、県道信濃信州新線建設に伴う発掘調査（渡辺、1996）が実施されている。1998年には個人住宅に伴う発掘調査（信濃町教育委員会、1999）が実施され、それぞれの調査において、おもに旧石器時代の遺物が多数出土している。

今回、遺跡内を通る県道信濃信州新線の改良工事が計画されたため（図3）、信濃町建設水道課建設係と協議の上、試掘調査を実施した。この地点の地形は北側へ下る傾斜地で、既存の道路を建設する際に大きく切り割られており、調査は法面の上でおこなうことになった。拡幅部分の現状は山林で、支障木は未伐採であった。工事は既存の道路を拡幅するものであったため、拡幅部分が1m以上あって試掘用のトレンチを設定できる部分のみを対象とし、6ヶ所の試掘トレンチを設定した。1カ所から石器

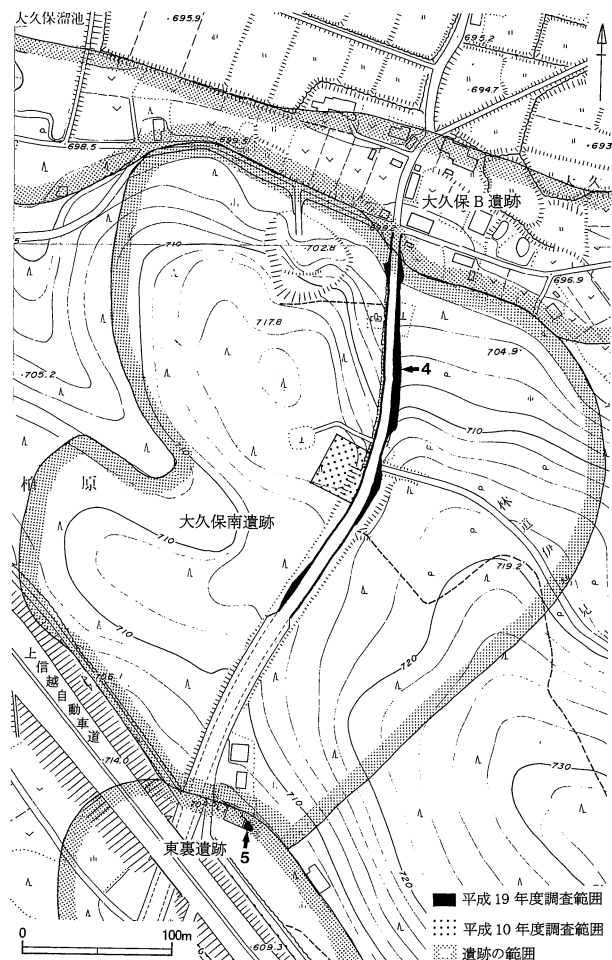


図3 大久保南遺跡・東裏遺跡の範囲と調査地の位置

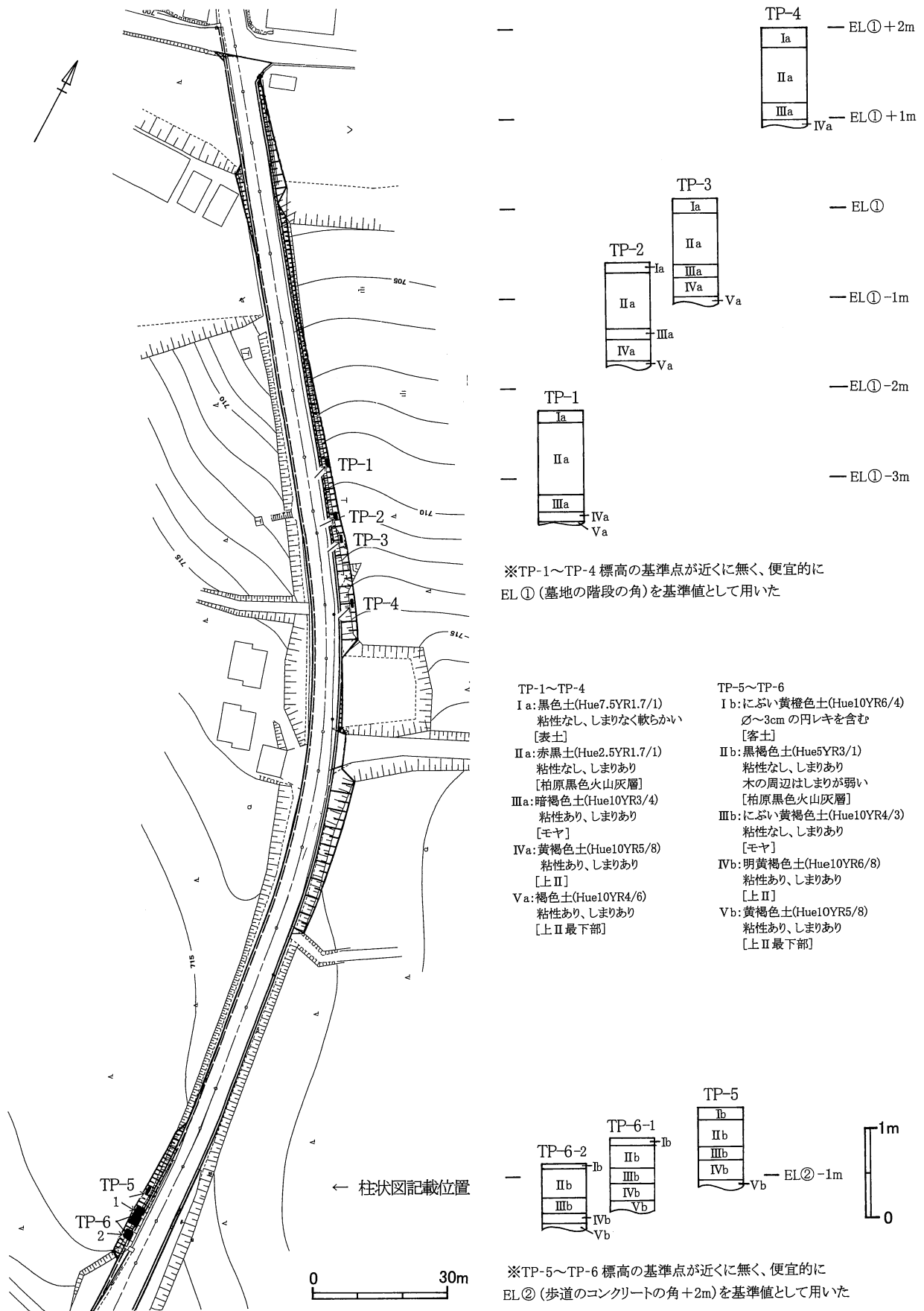


図4 大久保南遺跡の調査範囲と土層

が出土したことから周辺を拡張し、遺物の分布状況を確認した。

C. 調査の方法

道路改良が計画された範囲の中で調査可能な地点に1.5×0.8mのトレンチを6ヶ所設定した(図4)。試掘トレンチは北からTP-1~TP-6とした。比較的急傾斜な地域に設定したTP-1~TP-4からは遺物が出土しなかった。そのためこの付近は遺跡の分布が希薄な地域と判断した。比較的平坦な地点に設定したTP-5、6では、TP-6からのみ石器が出土した。そのため、TP-6を南北に拡張することにしたが、いずれも立木により一部発掘ができなかった(図5)。しかし、北側はTP-5では遺物が出土していないことから、北側の分布の範囲はほぼ捉えられたと考えられる。また、南側は工事用地が狭くなるためこれ以上の拡張は困難で、調査が可能な範囲についてはほぼ発掘を実施することができたと思われる。調査は実質4日間実施した。降雨のために間隔があいたが、9月4日、5日、10日に手掘りによる掘削をおこない、12日に記録をとって終了した。

D. 調査の結果

a. 層序

調査地点の層序は、野尻湖周辺の丘陵で通常確認できる層序と基本的に一致する。各TPの土層柱状図は図4に示した。TP-1~4とTP-5~6は地点が離れているためにその対応関係に確認が得られないため、土層を表すローマ数字にTP-1~4にはaを、TP-5~6にはbを付したが、同じローマ数字のものはほぼ同層準と考えている。土層の注記の色は新版標準土色帖を用いて判断した(以下、他の遺跡でも同様)。また、各層準の土層注記の最後に野尻湖周辺の風成の層序区分を[]で示した(以下、他の遺跡でも同様)。この区分は野尻湖人類考古グループ(1994)に従っている。柏原黒色火山灰層の下位にモヤがあるが、この地点ではそれを細分できなかった。上IIは上部野尻ローム層IIの略で、この地点では上IIについても細分できなかった。上II最下部は始良Tn火山灰(AT)に対比される「ヌカI」火山灰を含む層準である。

b. 出土遺物の概要

出土した遺物の総点数は41点で、内訳は石器が16点、礫が25点である。遺物に関するデータは、石器を表2、礫を表4で示した。遺物の出土層準はIIb~Vb層で、石器はIIIb層が10点で63%を占め、礫ではIIIb層、IVb層がともに11点で44%を占める。

c. 遺物の分布と遺構

遺物の分布状況は図5に示した。石器は平面的には特に集中する地点はなく、出土層準もまとまりがみられないことから、全体に散漫に分布するという印象である。礫は南側にまとまりが見られ、礫群として図化した(図6)。北側の礫は散漫な分布状況で、出土層準はIVb層が多い。南側の礫の出土層準はIIIb層が多いが、この地点のIIIb層は部分的に厚くなっており、木の根による攪乱などが大きく影響しているように観察された。本来は下位の層準にあったものが、攪乱によって上位の層へ混入し、本来は北側で出土した礫と同様にIVb層に包含されていたものと考えておきたい。また、巨礫1点が出土した(図5)。遺物番号14で、長軸が23.4cmあり、重

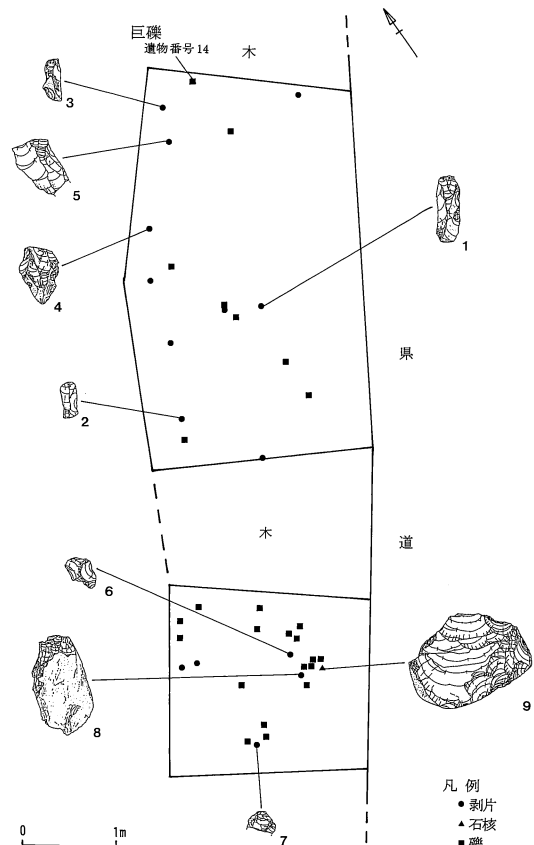


図5 大久保南遺跡 TP-6の遺物分布

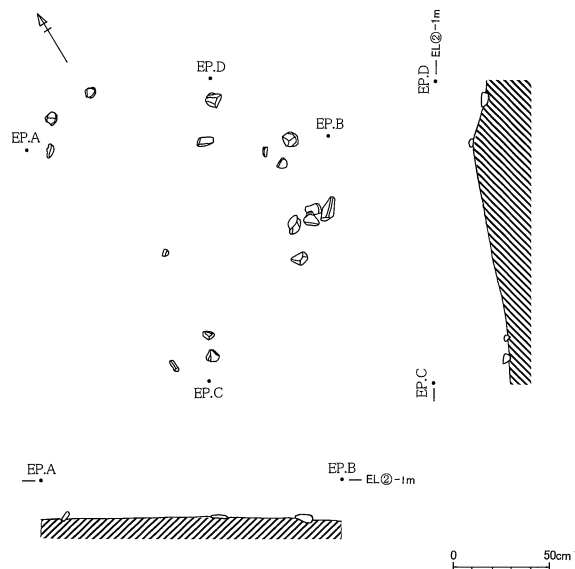


図6 大久保南遺跡 TP-6の礫群

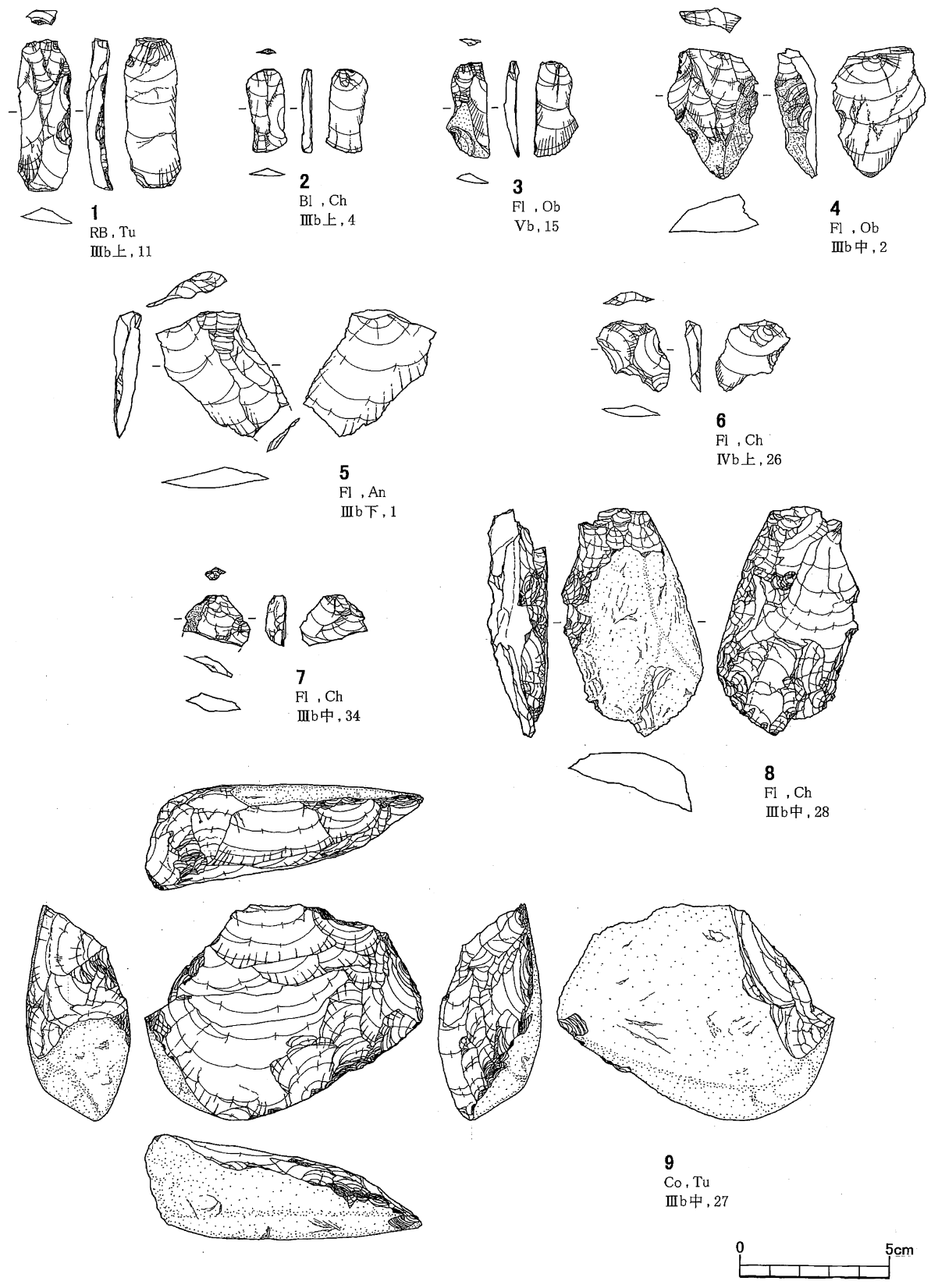


図7 大久保南遺跡の主な出土遺物（石刃，剥片，石核）

さは8.8kgの安山岩で、全体に熱を受けている。これと遺物番号13の礫の2点が、他の遺物よりも下位のVb層から出土しており、他の遺物と時期差がある可能性があるが、石器が共伴していないため、これ以上は言及できなかった。

d. 出土遺物

出土した石器16点の内、9点を図示し（図7）、そのデータと特徴を表2に示した。図7では、遺物に1からの通し番号を図番号として付け、その下に遺物名の略号、石材名の略号、出土層準、遺物番号の順に記述した。

1、2は石刃である。1は縁辺に弱い二次加工と微細剥離痕がある。3～8は剥片である。3、4は黒曜石製の縦長の剥片である。5、6は長軸と剥片剥離の方向が一致しない剥片である。8は背面に自然面を多く残す大形の剥片である。9は石核で、自然面を多く残している。剥片の剥離は打点を横方向に移しながら複数の幅広の剥片の剥離をおこなっている。

礫は25点出土したが、その属性表を示し（表4）、その平均値と統計的なデータを示した（表3）。なお、割れの割合は、礫の表面に対して、割れ面が占める割合、焼けの程度は礫の表面の赤化が強いものを3、弱いものを1、その中間のものを2とした。平面形は観察者の感覚で判断し、平面形が長細いものを長、縦横比が同じ程度のものを短とし、角張っているものを角、角が取れているものを丸とした。統計的なデータを見ると、92%が焼けており、全部が割れている。焼けている礫のすべてが、割れ面も焼けており、ここでは礫を繰り返し使っている様子がうかがえ、調理施設等で利用したことが想定できる。

表2 大久保南遺跡 全出土石器と主な石器の観察表

図番号	遺物番号	遺物名	石材	層準	標高(m)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴
1	11	二次加工のある石刃	Tu	III b 上	0.98	5.2	1.8	0.7	5.9	単剥離面打面を加撃して剥離された石刃で、頭部調整の痕跡が見られる。剥離角は102度。背面右側縁には、剥片の傾斜に沿った剥離が施され、縁辺部には刃こぼれ状の微細な剥離痕が見られる。
2	4	石刃	Ch	III b 上	1.15	2.8	1.3	0.4	1.2	複剥離面打面を加撃して剥離された石刃。背面左下に節理面がある。剥離角は97度。
3	15	剥片	Ob	V b	1.25	3.2	1.4	0.6	1.3	単剥離面打面を加撃して剥離された剥片で、頭部調整の痕跡が見られる。背面の3分の1程度に自然面が残る。剥離角は101度。右側縁に発掘時の剥離痕(ガジリ)あり。
4	2	剥片	Ob	III b 中	1.12	4.3	3.1	1.4	13.5	単剥離面打面を加撃して剥離された縦長の剥片。背面の4分の1程度に自然面が残る。剥離角は104度。打点が明瞭で点的な加撃によるものとわかる。
5	1	剥片	An	III b 下	1.13	4.3	4.5	0.8	10.6	複剥離面打面を加撃して剥離された縦長の剥片で、剥片の長軸と剥片剥離の方向は一致していない。剥離角は104度。背面にも縦長剥片の剥離痕があり、剥片の連続剥離が見られる。
6	26	剥片	Ch	IV b 上	1.30	2.7	2.0	0.5	2.0	単剥離面打面を加撃して剥離された幅広の剥片。剥離角は96度。両縁辺に微細な剥離痕が見られる。
7	34	剥片	Ch	III b 中	1.36	1.6	2.2	0.6	2.0	複剥離面打面を加撃して剥離された剥片で末端部を欠損する。背面に自然面が残る。
8	28	剥片	Ch	III b 中	1.18	7.8	4.6	1.7	59.8	背面に自然面を多く残す縦長の剥片。単剥離面打面を剥離角104度で加撃して剥離されている。背面に頭部調整の剥離が見られる。
9	27	石核	Tu	III b 中	1.22	7.2	9.3	3.4	226.0	自然面を多く残した板状の石核。自然面の状況から母岩は円礫と思われる。円礫を板状に分割し、自然面の平坦な面を打面として加撃し、幅広の剥片を剥離している。剥離角は110から120度である。縁辺には頭部調整と思われる微小な剥離が見られる。
3	剥片	Ch	III b 上	1.11	2.2	1.4	0.4	0.8		
6	剥片	An	II b 中	0.97	3.3	2.5	0.4	2.4		
12	剥片	Ch	III b 上	0.92	1.4	1.3	0.3	0.4		
17	剥片	Ch	IV b 下	1.36	1.3	2.0	0.2	0.6		
35	剥片	Ch	IV b 上	1.41	2.5	2.3	0.5	2.5		
36	剥片	Ch	III b 上	0.98	2.4	1.4	0.7	2.3		
37	剥片	Ch	IV b 上	1.48	1.5	1.7	0.8	1.6		

表3 大久保南遺跡 礫の平均値と割合

長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	割れの 割合 (%)	焼けの 割合 (%)	焼け (3段階)
7.7	5.9	3.4	519.4	100	92	1.9

長	15点	60%	角	22点	88%
短	10点	40%	丸	3点	12%

表4 大久保南遺跡 礫の属性表

遺物 番号	層準	標高 (m)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	割れ あり○ なし×	割れ の割 合%	焼け あり○ なし×	焼け (3段 階)	自然 面 の 焼 け	自然 面 の 焼 け %	割れ 面 の 焼 け	割れ 面 の 焼 け %	平面 形 (長短)	平面 形 (角丸)	接合
5	IV b 上	1.22	10.2	6.9	5.3	478.0	○	40	○	3	○	90	○	60	長	角	
7	IV b 中	1.36	4.3	4.0	2.2	37.2	○	80	○	3	○	100	○	60	短	角	
8	IV b 上	1.22	3.8	1.5	1.4	7.8	○	10	○	2	○	100	○	100	長	角	
9	IV b 上	1.16	8.5	4.8	2.9	114.9	○	70	○	2	○	100	○	60	長	角	
10	IV b 上	1.19	6.8	4.1	1.4	34.1	○	100	×						長	角	
13	V b	1.33	14.0	9.5	7.4	1138.0	○	20	×						長	角	
14	V b	1.34	23.4	21.0	16.4	8800.0	○	10	○	1	○	100	○	100	短	角	
16	V b	1.34	3.5	2.0	1.5	9.3	○	80	○	2	○	100	○	70	長	角	
18	III b 下	1.30	5.1	3.7	1.8	35.1	○	70	○	3	○	80	○	80	長	角	
19	III b 中	1.29	8.4	5.8	5.0	271.0	○	30	○	2	○	90	○	90	長	角	
20	III b 中	1.22	6.4	5.3	1.5	54.9	○	70	○	2	○	80	○	70	短	角	
21	IV b 上	1.28	7.2	5.8	3.6	188.5	○	70	○	2	○	100	○	40	短	角	
22	III b 中	1.20	8.1	3.7	1.7	43.2	○	90	○	2	○	100	○	100	長	角	23
23	III b 中	1.23	8.2	7.1	2.2	105.6	○	70	○	2	○	100	○	100	短	丸	22
24	III b 中	1.20	5.9	3.6	2.5	71.1	○	60	○	1	○	100	○	80	長	角	
25	IV b 上	1.35	3.3	2.1	0.6	2.7	○	70	○	1	○	100	○	90	長	角	
29	III b 下	1.26	9.7	7.3	3.5	275.0	○	30	○	1	○	100	○	60	短	角	
30	III b 中	1.28	4.5	3.3	1.7	26.8	○	70	○	1	○	80	○	100	長	角	
31	IV b 上	1.39	6.1	5.5	3.0	90.3	○	60	○	2	○	100	○	100	短	丸	32・38
32	III b 下	1.40	6.7	5.9	2.2	91.7	○	70	○	2	○	100	○	100	短	丸	31・38
33	III b 下	1.38	5.6	2.6	1.1	13.3	○	70	○	2	○	100	○	100	長	角	
38	III b 下	1.27	5.1	9.0	3.3	128.7	○	60	○	2	○	100	○	100	長	角	31・32
39	IV b 上	1.31	6.6	6.1	2.7	128.6	○	40	○	3	○	100	○	90	短	角	
40	IV b 上	1.32	12.7	9.1	4.0	464.0	○	30	○	1	○	90	○	10	長	角	
41	IV b 上	1.31	8.3	7.6	5.5	374.0	○	40	○	1	○	70	○	40	短	角	

E. まとめ

今回の調査地点では礫群を伴う石器群を検出した。出土層準はII b層からV b層までと幅をもつが、時期差の観点から遺物を分類することは困難であったため、これらはすべて同一時期のもので、それが上下の層に拡散したものと考えておきたい。本来の生活面は石器よりも重い礫の出土状況から考えると、礫群を構成するTP-6南側の礫はIII b層からの出土が多いが、この地点のIII b層は上下の地層が入り乱れている状況が観察されたため、安定していないと判断した。北側はIV b層上部から礫が多く出土しており、安定した出土状況を見てとることができた。こうしたことから、今回検出した石器群の本来の生活面はIV b層上部とした。

石器は石刃と幅広の剥片が共存する。石材は黒曜石、無斑晶質安山岩、チャート、凝灰岩と多様で、肉眼で観察した限りでは同一母岩から剥離されたと思われるものはなく、碎片が出土していないことから、石器製作地ではないと思われる。礫群の存在から、この地点は一時的な野営をしたような場所と考えておきたい。

編年的位置づけであるが、IV b層上部は野尻湖人類考古グループ(1994)の層序区分では上II上部にあたる。この層準には石刃技法をもつ杉久保系石器群などにより上II上部文化層が設定されており、今回出土した遺物はこれに属するものと判断した。谷(2007)による編年では野尻湖第IV期に含まれ、南関東のIV層上部に対比される。

5. 東裏遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字柏原字上ノ原266-3、266-8
原因	個人住宅建設
調査方法	工事立会
調査面積	700㎡(工事面積)
調査期間	平成19年7月26日
出土遺物点数	0点

B. 遺跡の環境と調査に至る経緯、調査の結果

東裏遺跡は伊勢見山と国道18号線との間に位置し、伊勢見山の南西の山麓に、北西・南東方向に細長く広がる遺跡である。この遺跡は面積が広いことから、過去に多数の発掘調査が実施されてきた。主な調査は1993年の宅地造成と町道建設に伴う発掘調査（信濃町教育委員会，2004a）、1993～1995年の上信越自動車道建設に伴う発掘調査（長野県埋蔵文化財センター，2000a）、1996のバスストップ建設、個人住宅建設に伴う調査（信濃町教育委員会，1997）、1997年のガスパイプライン建設に伴う発掘調査（信濃町教育委員会，2007b）、1999年の個人住宅建設に伴う発掘調査（信濃町教育委員会，2000）などがあり、ほかにも小規模な発掘調査がおこなわれている（信濃町教育委員会，2005、2007aなど）。

この東裏遺跡内で個人住宅の増築が計画された（図3）。計画は既存の住宅の東側へ増築するというもので、そこはすでに既存の住宅を建設する際に傾斜地を平坦に削平して造成されたことがわかり、遺跡が残されていない可能性が高いと判断されたため、工事立会を実施し、状況の確認をおこなった。

6. 上ノ原遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字柏原字上ノ原169-4
原因	個人住宅建設
調査方法	工事立会
調査面積	330㎡（工事面積）
調査期間	平成19年5月22日
出土遺物点数	0点

B. 遺跡の環境と調査に至る経緯、調査の結果

上ノ原遺跡は貫ノ木遺跡と東裏遺跡に挟まれた丘陵上に位置する。遺跡は面積が広く、過去に多数の発掘調査が実施されてきた。主な調査は1990年の開墾に伴う発掘調査（中村，1992a、1992b）、1994～1995年の上信越自動車道建設に伴う発掘調査（長野県埋蔵文化財センター，2000a、2000c）、1995年の店舗兼住宅建設（上ノ原遺跡第4次調査）、個人住宅建設に伴う調査（信濃町教育委員会，1996）、1997年のガスパイプライン建設に伴う発掘調査（信濃町教育委員会，2007b）、2006年の研究所建設に伴う試掘調査（信濃町教育委員会，2007a）などがあり、主に旧石器時代の多くの遺物が得られている。

上ノ原遺跡内で個人住宅の建設が計画され（図8）、現地を確認したところ、住宅が解体されてさら地となっていた。傾斜地を大きく削って造成された上に住宅が建てられていたということで、遺物包含層は残されていない可能性が高いと判断した。よって、工事立会とし、状況の確認をおこなって終了した。

7. 緑ヶ丘遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字柏原字小丸山 2520-1
原因	倉庫建設
調査方法	工事立会
調査面積	20㎡（工事面積）
調査期間	平成19年10月29日
出土遺物点数	0点

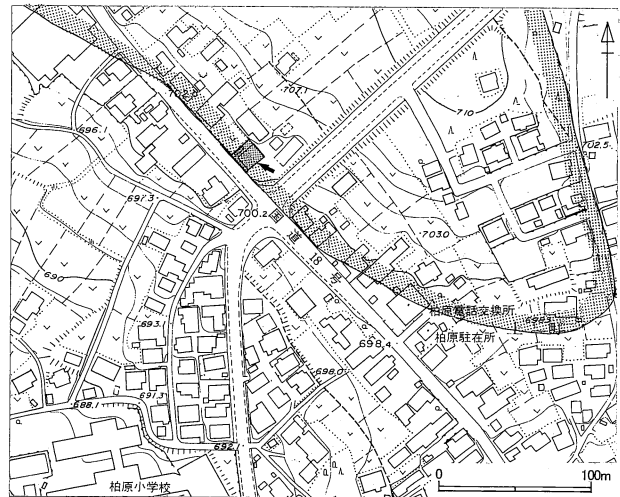


図8 上ノ原遺跡の範囲と調査地の位置

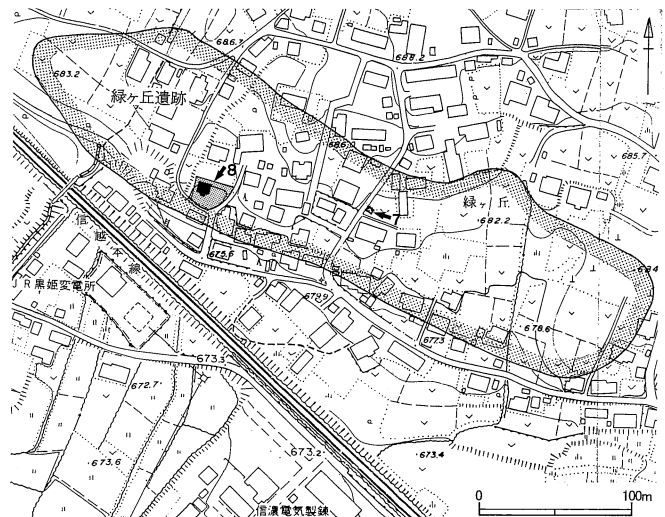


図9 緑ヶ丘遺跡の範囲と調査地の位置

B. 遺跡の環境と調査に至る経緯、調査の結果

緑ヶ丘遺跡は上ノ原遺跡の広がる丘陵の頂部から南西方向へ下った丘陵の末端部にあり、JR 黒姫駅の北西に位置する。この遺跡でこれまでに発掘調査はおこなわれておらず、遺跡の詳細は不明である。

この緑ヶ丘遺跡内の畑地で倉庫の建設が計画された(図9)。計画では基礎工事で掘削する幅が狭いため、調査を実施することが困難と判断されたことから、工事立会とし、状況の確認をおこなって終了した。

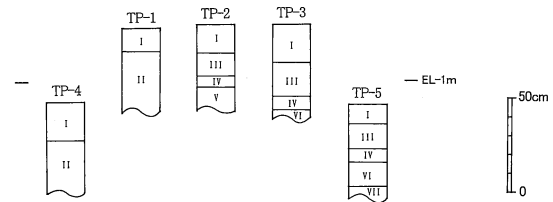
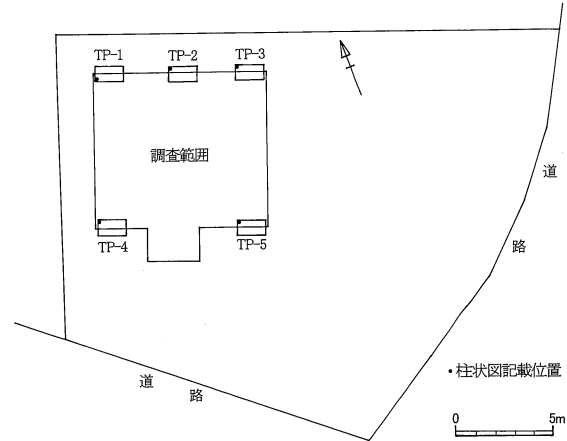
8. 緑ヶ丘遺跡(2007個人住宅地点)

A. 概要

所在地 信濃町大字柏原字小丸山2528-11
 原因 個人住宅建設
 調査方法 試掘調査
 調査面積 6㎡
 調査期間 平成19年9月3日
 出土遺物点数 0点

B. 調査に至る経緯と調査結果

緑ヶ丘遺跡内の荒蕪地で個人住宅建設が計画されたため(図9)、遺跡の状況を確認するための試掘調査を実施した。この周辺では過去に発掘調査がおこなわれていないため、遺跡の状況は不明であった。建設予定地は南側へなだらかに下っている。基礎工事の外周の四隅とその中間地点に1.5×0.8mの試掘トレンチをTP-1～5の5ヶ所に設置し(図10)、手掘りによる発掘を実施した。発掘の深度は、基礎工事の深度の50cmまでとした。もとは畑地であったため、地表下には耕作土があり(I層)、その下位には黒ボク土がある(II、III層)。黒ボク土は西側では厚く、東側では薄くなっていた。東側では黒ボク土の下には褐色土が分布していた。褐色土は水分を多く含んでおり、風成のローム層との対比はできなかった。これらのトレンチからは遺物は出土せず、遺構も検出できなかったことから、本調査は必要ないと判断し、調査を終了した。



※標高の基準点が近くに無く、便宜的にELを基準値として用いた

- | | |
|--|--|
| I : 黒色土(Hue10YR2/1)
粘性なし、しまり弱い
【耕作土】 | V : 褐色土(Hue7.5YR4/3)
粘性あり、しまりあり
φ~5mmの褐色スコリアを含む
水分を多く含む |
| II : 黒色土(Hue5YR1.7/1)
粘性なし、しまり弱い
水分を多く含む
【柏原黒色火山灰層】 | VI : 褐色土(Hue10YR4/6)
粘性あり、しまりあり |
| III : 黒色土(Hue10YR1.7/1)
粘性なし、しまりあり
【柏原黒色火山灰層】 | VII : 明褐色土(Hue7.5YR5/8)
粘性あり、しまりあり
φ~2cmの小レキと青灰色岩片を含む |
| IV : 褐色土(Hue7.5YR4/3)
粘性あり、しまりあり | |

図10 緑ヶ丘遺跡の調査範囲と土層

9. 長水 A 遺跡

A. 概要

所在地 信濃町大字柏原字長水4836-1
 原因 携帯電話アンテナ建設
 調査方法 工事立会
 調査面積 1.69㎡(工事面積)
 調査期間 平成19年9月11日
 出土遺物点数 0点

B. 遺跡の環境と調査に至る経緯、調査の結果

長水 A 遺跡は黒姫山の山麓の、東側へなだらかに下る傾斜地にある遺跡で、長水の集落の西側に位置する。これまでに発掘調査は実施されていないが、山岳信仰の法具などが採取されており、平安時代と中世の遺跡とされている(信濃町教育委員会, 2003)。

この長水 A 遺跡内で携帯電話のアンテナ設置工事が計画された(図11)。計画では掘削が予定された面積が1.69㎡であり、狭小のために調査は困難と

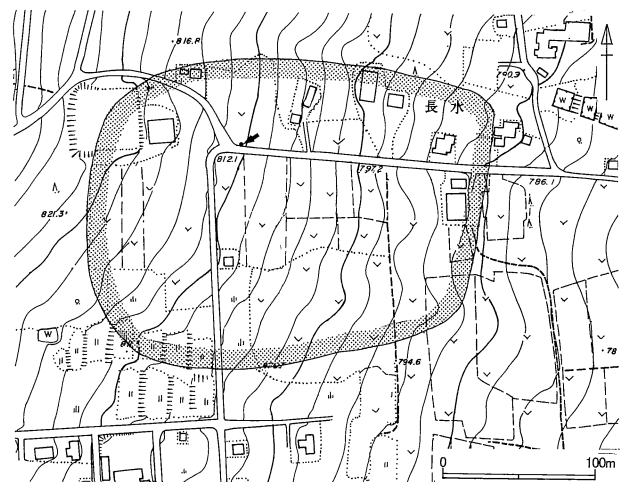


図11 長水 A 遺跡の範囲と調査地の位置

判断されたため、工事立会とし、状況の確認をおこなって終了した。

10. 東裏遺跡

A. 概要

所在地 信濃町大字柏原字東裏470-1
 原因 個人住宅建設
 調査方法 工事立会
 調査面積 120㎡ (工事面積)
 調査期間 平成19年7月26日
 出土遺物点数 0点

B. 調査に至る経緯と調査結果

東裏遺跡内で個人住宅の建設が計画された(図12)。計画では既存の建物を解体した後、ほぼ同じ位置に建設するというものであった。既存建物の基礎工事及びその撤去によって大きく変更され、遺跡が残されていない可能性が高いと判断されたため、工事立会とし、状況の確認をおこなって終了した。

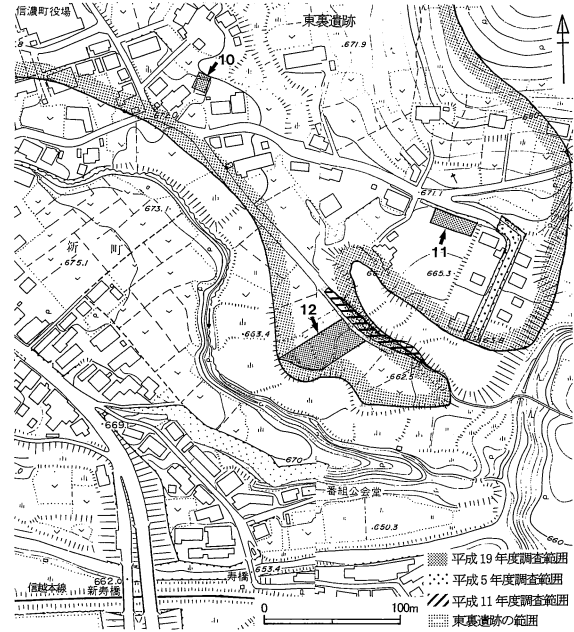


図12 東裏遺跡の範囲と調査地の位置

11. 東裏遺跡 (2007個人住宅地点)

A. 概要

所在地 信濃町大字柏原字東裏481-1
 原因 個人住宅建設
 調査方法 試掘調査
 調査面積 9.6㎡
 調査期間 平成19年11月7日
 出土遺物点数 0点

B. 調査に至る経緯と調査結果

東裏遺跡内の畑地で個人住宅建設が計画されたため(図12)、遺跡の状況を確認するための試掘調査を実施した。ここは平成5年度に宅地造成と町道建設に伴い発掘調査がおこなわれ、縄文時代早期の沈線文系土器が出土した地点(信濃町教育委員会, 2004a)に近いことから、今回の住宅建設地まで遺跡が広がっている可能性が考えられた。建設予定地は北側の町道よりも2m以上低くなっており、地形は南側へなだらかに下る傾斜地であった。基礎工事の外周の四隅とその中間地点に1.5×0.8mの試掘トレンチを8ヶ所設置し(図13)、手掘りによる発掘を実施した。発掘の深度は、基礎工事の深度の50~60cmまでとした。TP-1~4では黒ボク土の下から粘土質やシルト質の地層が確認された。TP-5~8では黒ボク土が厚く堆積していた。これらのトレンチからは遺物は出土せず、遺構も検出できなかったことから、本調査は必要ないと判断し、調査を終了した。

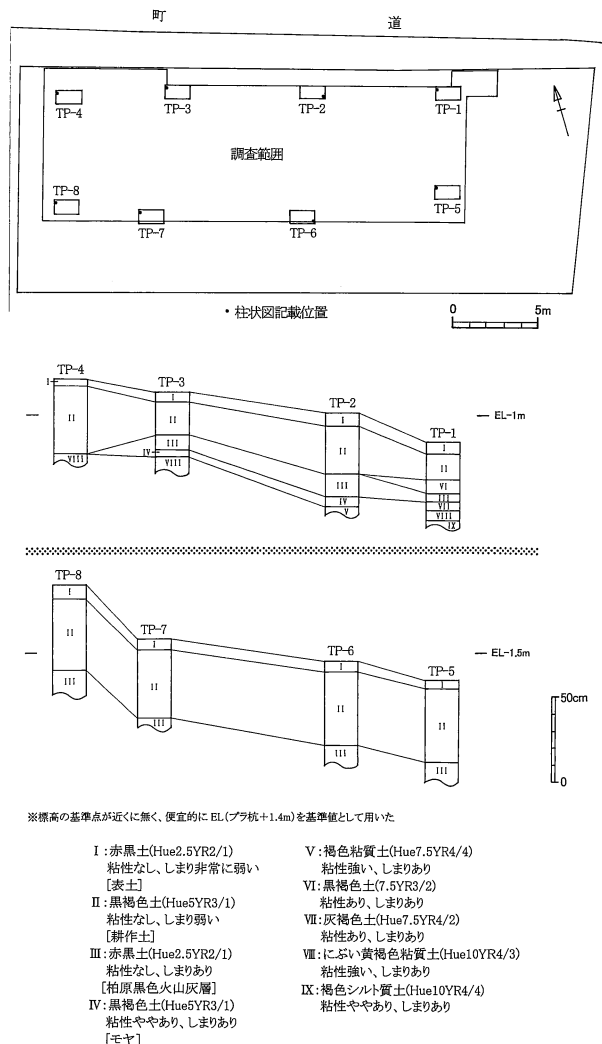


図13 東裏遺跡 (2007個人住宅地点) の調査範囲と土層

12. 東裏遺跡 (2007医師住宅地点)

A. 概要

所在地 信濃町大字柏原字東裏464-7

原因 個人住宅建設
 調査方法 試掘調査
 調査面積 37.2㎡
 調査期間 平成19年4月25日～5月7日
 出土遺物点数 68点

B. 調査に至る経緯

東裏遺跡内の町道柴山線に沿った畑地に、信濃町立信越病院の医師が入居するための公営の住宅建設が計画されたため（図12）、遺跡の状況を確認するための試掘調査を実施した。町道柴山線建設に伴う発掘調査では縄文時代早期の沈線文系土器群が出土している（信濃町教育委員会，2004a）ことから、今回の住宅建設地まで遺跡が広がっていることが予想された。2ヶ所の試掘トレンチで遺物包含層が確認できたため、拡張して遺物の分布状況を調査した。調査は4月25日～5月7日の間に、6日間実施した。

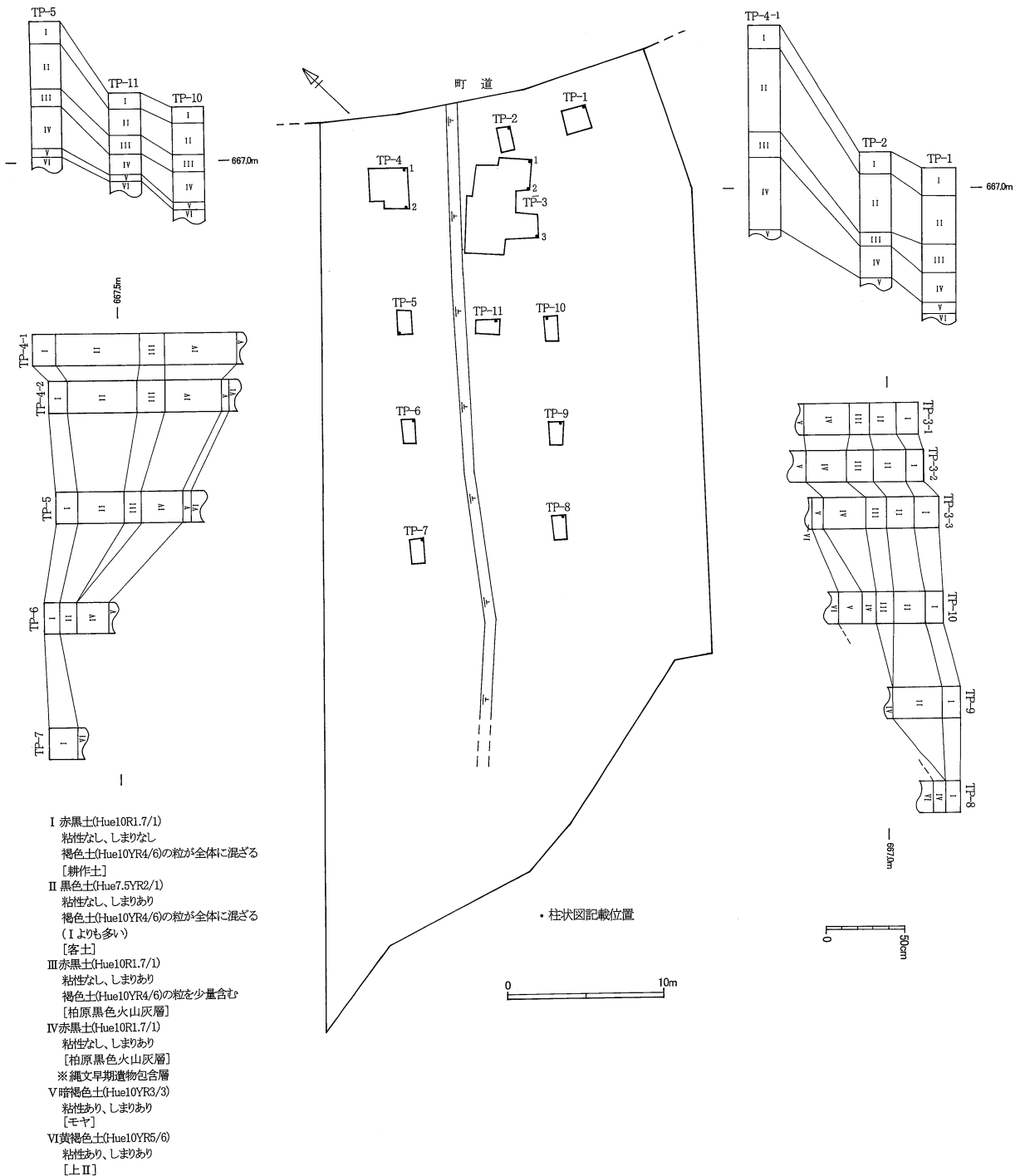


図14 東裏遺跡（2007医師住宅地点）の調査範囲と土層

C. 調査の方法

建物の建設予定地は町道よりも一段高く、1m以上上がっていた。また、2枚の畑にまたがっていて、中央部には段差がつけられていて、土手状になっていた。町道に面して車庫を建設する計画で、その範囲は町道と同じ高さまで土地を削平し、造成するということがあった。車庫建設部分にはTP-1～4の試掘トレンチを設け、住宅建設予定地については、基礎工事の外周の四隅とその中間地点にTP-5～11の7ヶ所の試掘トレンチを設定した(図14)。試掘トレンチは1.5×0.8mで、すべて手掘りにより発掘を実施した。TP-3と4から縄文土器が複数出土したことから、拡張し、遺物の分布がほぼ確認できたところで終了した。

D. 調査の結果

a. 層序

現地は2枚の畑の間に段差はあるが、それぞれの畑は平坦であった。この畑地は試掘調査で各トレンチの土層

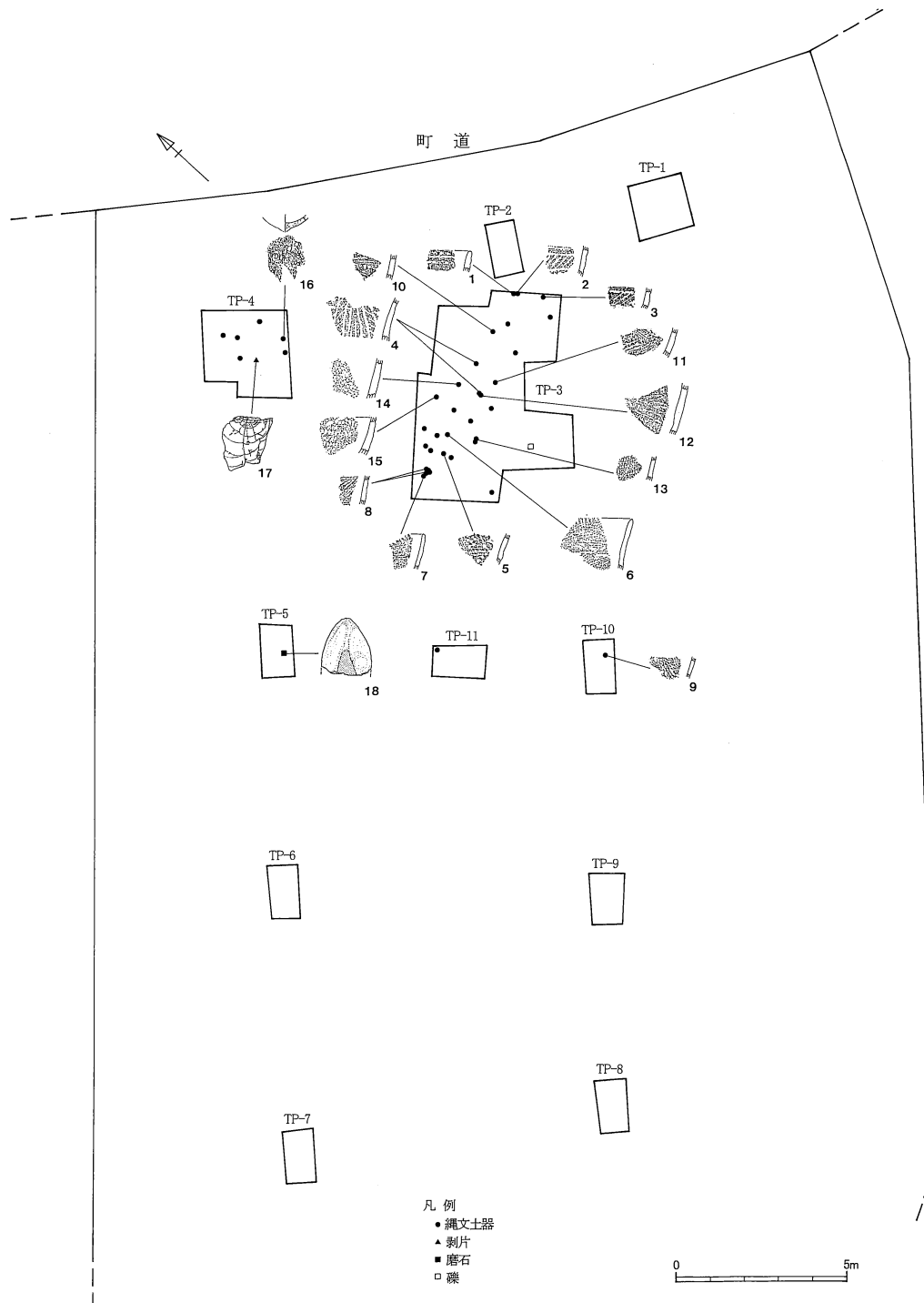


図15 東裏遺跡(2007医師住宅地点)の遺物分布

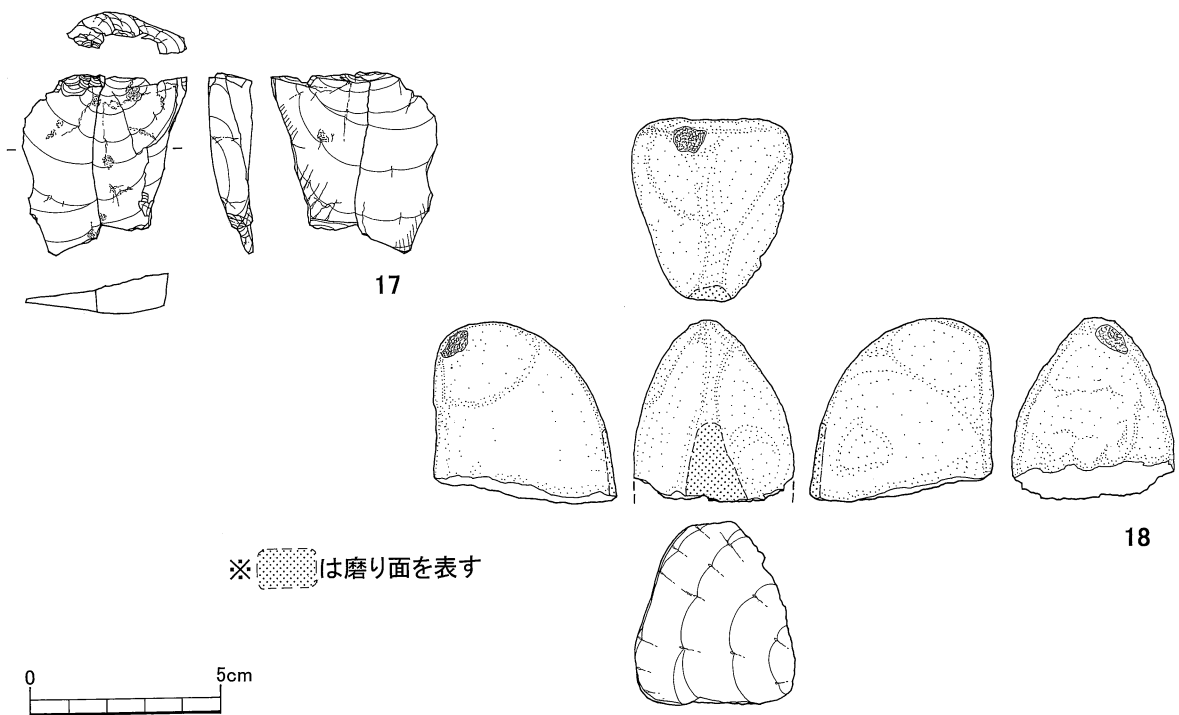
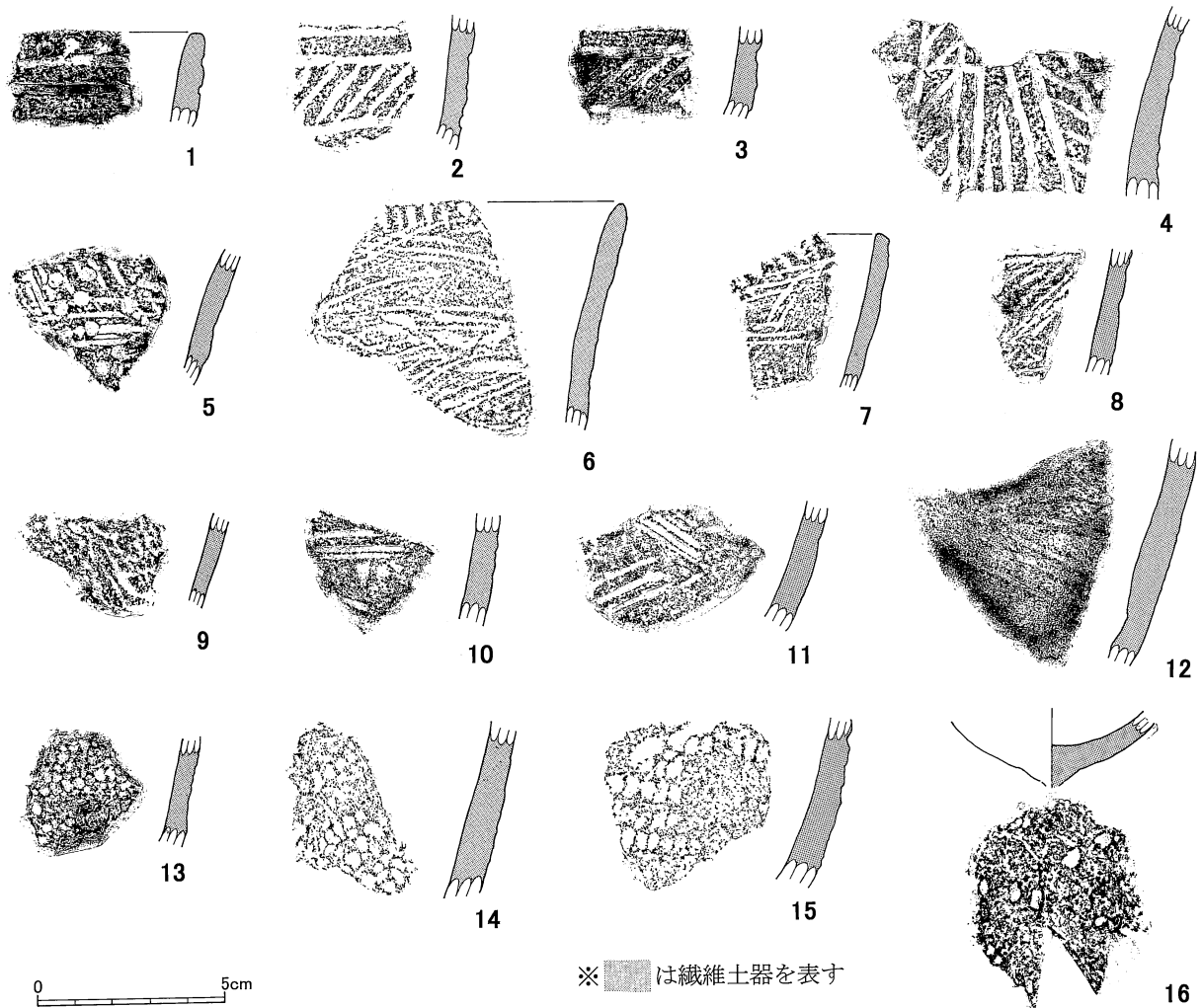


図16 東裏遺跡（2007医師住宅地点）の主な出土遺物（縄文土器，剥片，特殊磨石）

表5 東裏遺跡（2007医師住宅地点） 縄文土器の観察表

図番号	トレンチ	遺物番号	遺物名	部位	層準	標高(m)	文様	調整	含有物	繊維痕	色調		器壁厚さ(mm)	摘要
											内面	外面		
1	TP-3	44	縄文土器	口縁	IV 下	666.523	横位沈線、口縁部に押し引いた工具の圧痕	ナデ	qt、ho、白、赤、小レキ	○	褐	黒	6-9	
2	TP-3	34	縄文土器	胴	IV 中	666.563	横位沈線間に連続した斜行沈線	ナデ	qt、ho、白、赤、小レキ	○	にぶい褐	黒褐	7	
3	TP-3	33	縄文土器	胴	IV 中	666.553	横位沈線間に連続した斜行沈線	ナデ	qt、ho、白、赤、小レキ	○	褐	黒褐	7	
4	TP-3	5	縄文土器	胴	IV 中	666.733	縦位沈線間に連続した斜行沈線	ナデ	qt、ho、白、赤、小レキ	○	灰褐	黒褐	7	
	TP-3	43			IV 中	666.753								
5	TP-3	27	縄文土器	胴	IV 中	666.873	横位・斜位沈線上に中空の円形工具による刺突痕	ナデ	qt、ho、白、赤	○	灰褐	にぶい褐	6	
6	TP-3	14	縄文土器	口縁	IV 中	666.853	横位・斜位の細沈線、一部交差。口縁部に連続した工具の刺突痕	ナデ	qt、ho、白、赤、小レキ	○	灰黄褐	にぶい褐	5	
7	TP-3	23	縄文土器	口縁	IV 中	666.913	横位・斜位の細沈線、一部交差。口縁部に連続した工具の刺突痕	ナデ	qt、ho、白、赤	○	褐灰	黒褐	5	
8	TP-3	41	縄文土器	胴	IV 中	666.903	横位・斜位の細沈線、一部交差	ナデ	qt、ho、白、赤	○	褐灰	黒褐	6	
	TP-3	45			IV 中	666.863								
9	TP-10	4	縄文土器	胴	III 中	666.963	斜位細沈線	ナデ	qt、ho、白、赤、小レキ	○	にぶい黄褐	にぶい褐	6	
10	TP-3	3	縄文土器	胴	IV 中	666.713	横位・斜位の細沈線、工具による刺突・押し引き痕	ナデ	qt、ho、白、赤、小レキ	○	赤褐	暗褐	7	角閃石が多く、繊維痕が少ない
11	TP-3	8	縄文土器	胴	IV 中	666.753	斜位の細沈線、一部交差	ナデ	qt、ho、白、赤、小レキ	○	にぶい赤褐	黒褐	6-8	角閃石が多く、繊維痕が少ない
12	TP-3	7	縄文土器	胴	IV 中	666.793	斜位の細沈線	ナデ	qt、ho、白、赤、小レキ	○	暗褐	黒褐	7-9	角閃石が多く、繊維痕が少ない
13	TP-3	12	縄文土器	胴	IV 中	666.833	縄文単節RL	ナデ	qt、白、赤、小レキ	○	暗褐	赤褐	6	角閃石を含まない
14	TP-3	6	縄文土器	胴	IV 中	666.833	縄文単節RL?	ナデ	qt、白、赤、小レキ	○	にぶい黄橙	橙	6-9	角閃石を含まない
15	TP-3	40	縄文土器	胴	IV 中	666.843	縄文単節RL	ナデ	qt、白、赤、小レキ	○	にぶい黄橙	橙	6-9	角閃石を含まない
16	TP-4	1	縄文土器	底	IV 中	666.843	乳房状の尖底。工具による刺突痕	ナデ	qt、白、赤、小レキ	○	黒褐	にぶい黄橙	5-9	角閃石を含まない

qt:石英、ho:角閃石、bt:黒雲母、白:白色岩片、赤:赤色岩片、小レキ:小さな礫を表す

表6 東裏遺跡（2007医師住宅地点） 石器の観察表

図番号	トレンチ	遺物番号	遺物名	石材	層準	標高(m)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴
17	TP-4	4	剥片	Tu	IV 中	666.833	4.7	4.3	1.1	15.5	複剥離面打面を加撃して剥離された剥片で、剥離角は100度。末端部は折れている。剥片剥離後に二つに割れている。
18	TP-5	5	特殊磨石	And	IV	667.053	4.8	4.2	4.8	107.8	上部に平坦な磨り面が残るため、特殊磨石の一部と思われる。

を観察することにより、傾斜地を平坦に造成してつくられたことが判明した。南西から北東側へ下る傾斜地の南西側を削平し、その土を北東側へ客土して造成していることがわかった。

I層は耕作土で畑地全体に広がる(図14)。II層が客土で、町道に面した側が最も厚くなっている。III層とIV層はこの地域に自然に堆積した黒ボク土で、野尻湖人類考古グループ(1994)の[柏原黒色火山灰層]に相当する。縄文土器等の遺物はIV層から出土した。V層は暗褐色土で[モヤ]に相当し、VI層は黄褐色土で、[上II]に相当する。柱状図を見ると(図14)、住宅建設予定地では南西側のTP-7で、耕作土の下位にVI層が見られることから、大きく削平されていることがわかる。遺物包含層であるIV層は町道側で厚く残っている。

b. 出土遺物の概要

遺物は68点出土した(表7)。内訳は縄文土器が48点、土師器14点、陶器2点、剥片1点、特殊磨石1点、砥石1点、礫1点である。出土地点では、TP-1から砥石と陶器が出土、TP-3から縄文土器40点、土師器5点、礫1点が出土、TP-4から縄文土器が6点、剥片1点が出土、TP-5から土師器が4点、特殊磨石が1点出土、TP-7からは土師器2点、陶器1点が出土、TP-10から縄文土器1点、土師器3点が出土、TP-11から縄文土器1点が出土、という状況である。土師器はすべてIまたはII層からの出土で、本来の遺物包含層は残されていない。また、小片のために図化できず、時期の特定も困難である。

c. 遺物の分布

縄文土器の遺物包含層と確認されたIV層で複数の遺物が出土したTP-3と4は徐々に拡張しながら、遺物の分布状況を確認した。縄文時代の遺物のみの分布を図に示した(図15)。出土層準はII層が2点、III層が2点で、

原因	個人住宅建設
調査方法	工事立会
調査面積	445㎡（工事面積）
調査期間	未着工
出土遺物点数	-

B. 遺跡の環境と調査に至る経緯

吹野原 B 遺跡は鍋山から北東の方向へ下っていく丘陵の先端に位置し、北側に鳥居川を望む。旧石器時代と平安時代の遺跡とされている（信濃町教育委員会，2003）が、これまでに発掘調査はおこなわれておらず、遺跡の詳細は不明である。

この吹野原 B 遺跡内で個人住宅の建設が計画されたが（図17）、この土地はかつて県営の集合住宅が建っていた場所で、その建物の撤去等によって大きく改変され、遺跡が残されていない可能性が高いと判断されたため、工事立会をおこなうことにした。しかし、事業主の都合により、未着工のままとなっている。

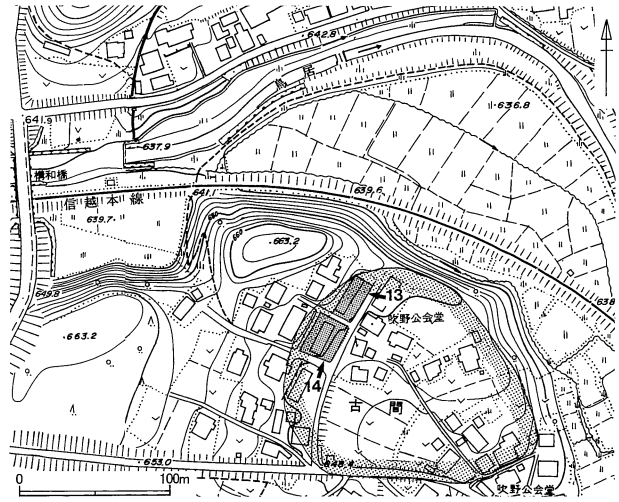


図17 吹野原 B 遺跡の範囲と調査地の位置

14. 吹野原 B 遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字古間1461-17
原因	個人住宅建設
調査方法	工事立会
調査面積	182㎡（工事面積）
調査期間	平成19年10月10日
出土遺物点数	0点

B. 調査に至る経緯と調査結果

13の吹野原 B 遺跡と同様に、かつて県営の集合住宅が建っていた場所に個人住宅建設が計画されたが（図17）、その建物の撤去等によって大きく改変され、遺跡が残されていない可能性が高いと判断されたため、工事立会をおこなうことにし、状況の確認をおこなって終了した。

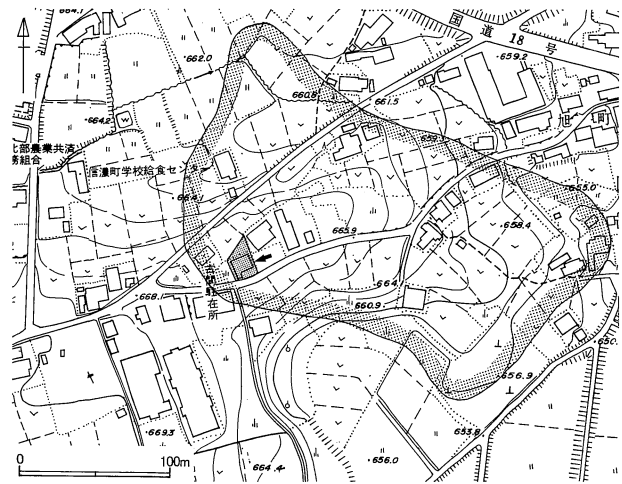


図18 一里塚遺跡の範囲と調査地の位置

15. 一里塚遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字古間字一里塚986-2
原因	個人住宅建設
調査方法	工事立会
調査面積	298㎡（工事面積）
調査期間	平成19年4月20日
出土遺物点数	0点

B. 遺跡の環境と調査に至る経緯、調査の結果

一里塚遺跡は鳥居川の南の台地上に位置する。近くには北国街道の古間一里塚跡がある。一里塚遺跡内では近年いくつかの個人住宅建設に伴う調査が実施されている。1995年（信濃町教育委員会，1996）、2001年（信濃町教育委員会，2002a）、2006年（信濃町教育委員会，2007a）に小規模な調査がおこなわれ、古代、中世の遺物が出土している。遺構は検出されていない。

この一里塚遺跡内で個人住宅の建設が計画された（図18）。計画は既存の建物を解体した後、ほぼ同じ位置に建設するというものであった。既存建物の基礎工事及びその撤去によって大きく改変され、遺跡が残されていない可能性が高いと判断されたため、工事立会とし、状況の確認をおこなって終了した。

16. 小古間遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字古間1300-1 ほか
原因	公道整備
調査方法	工事立会
調査面積	581㎡ (工事面積)
調査期間	平成19年10月26日
出土遺物点数	0点

B. 遺跡の環境と調査に至る経緯、調査の結果

小古間遺跡は小古間の集落の、北東側の台地上に位置する。平安時代の遺跡となっている（信濃町教育委員会，2003）が、これまでに発掘調査がおこなわれたことはなく、遺跡の詳細は不明である。

この小古間遺跡内の畑地で道路整備が計画された（図19）。道路整備は畑地の中を通る農道を約1m 拡幅するというもので、舗装はおこなわず、碎石を表面に敷くというものであった。掘削する箇所は少なく、また、掘削の範囲が狭いため、発掘調査は困難と判断され、工事立会として、状況の確認をおこなって終了した。

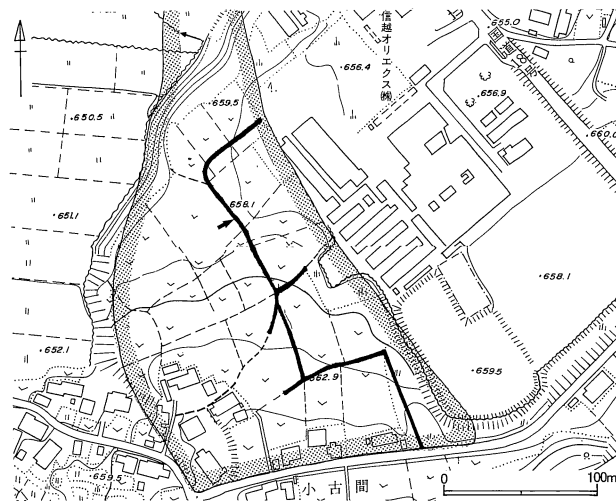


図19 小古間遺跡の範囲と調査地の位置

17. 大道下遺跡（2007工場・店舗地点）

A. 概要

所在地	信濃町大字穂波1967-1
原因	工場・店舗建設
調査方法	試掘調査
調査面積	29㎡
調査期間	平成19年5月23日～6月4日

出土遺物点数 156点

B. 遺跡の環境と調査に至る経緯

大道下遺跡は落影の集落の北にあり、鍋山から北西側へ緩やかに下る丘陵地の斜面に位置する。遺跡の中央には旧北国街道で、現在の国道18号線が通る。遺跡の時代は旧石器時代、縄文時代、平安時代とされている（信濃町教育委員会，2003）。遺跡内ではこれまでに4回の発掘調査及び試掘調査が実施されている（図20）。1989年には町道の建設に伴う発掘調査により縄文時代早期の遺物が多数出土している（信濃町教育委員会，1994）。1990年にはコンクリート工場の建設に先立ち試掘調査がおこなわれ、1991年には畑地の埋め立て事業に伴い発掘調査が実施されている（いずれも未報告）。1996年には埋め立て事業に伴い試掘調査が実施され、縄文時代早期の遺物が多数得られている（信濃町教育委員会，1997）。

今回、株式会社長野クボタ信濃町支店において、店舗と整備工場を既存の建物の北側へ建設するという計画があり、遺

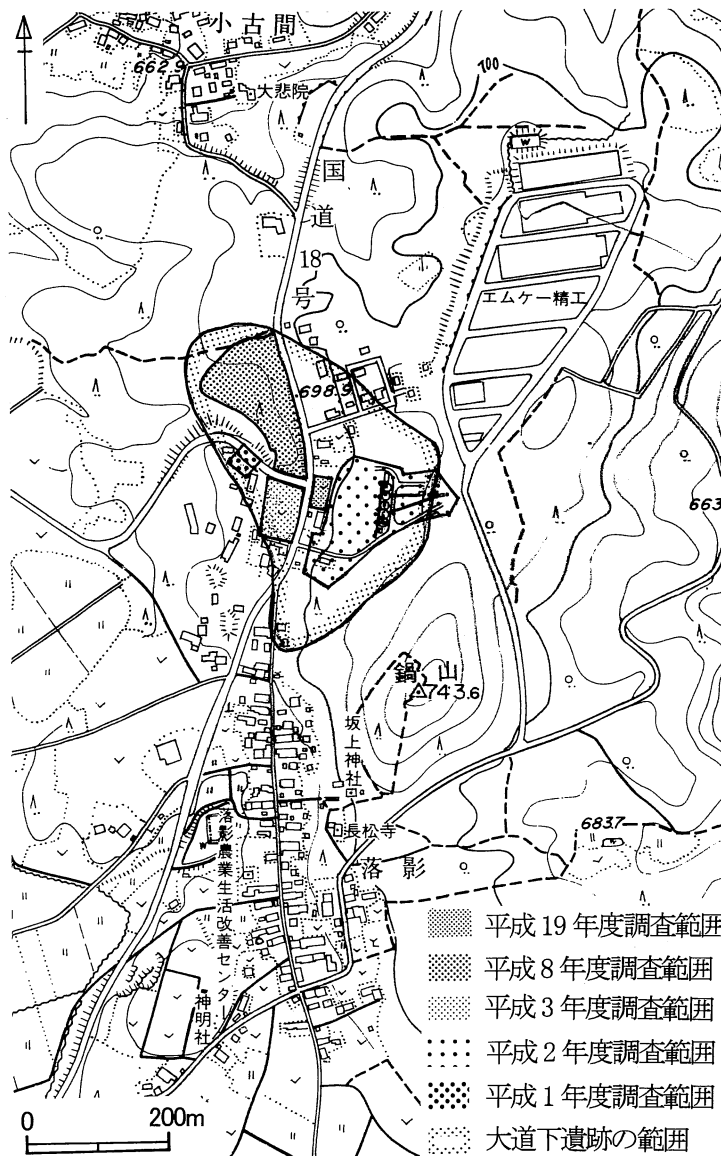


図20 大道下遺跡の範囲と調査地の位置

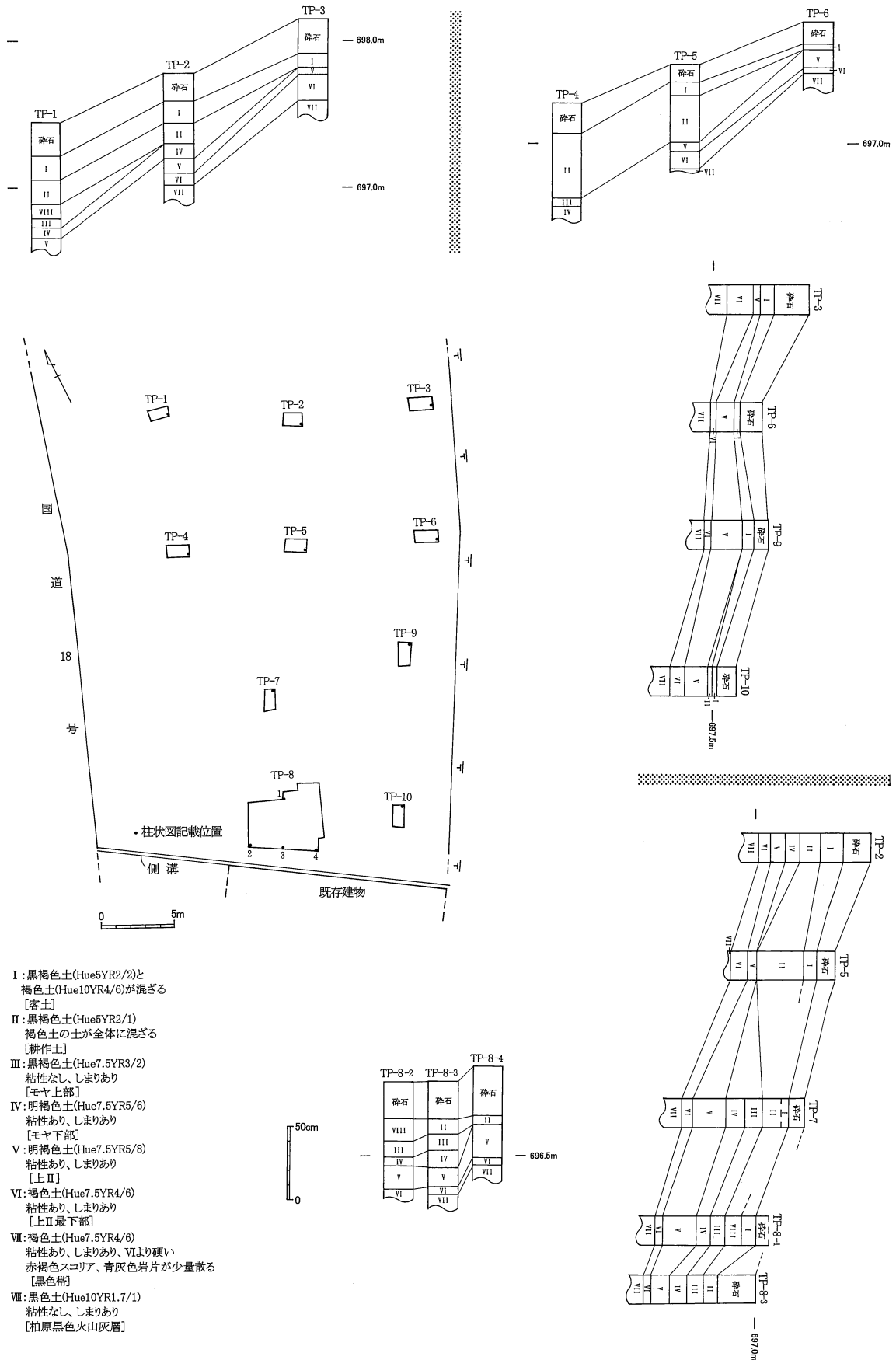


図21 大道下遺跡の調査範囲と土層

跡の保護について協議をおこなった。開発予定地の現状は砂利敷きの駐車場兼資材置場となっており、平坦に整地されていた。整地前は畑地であり、整地にあたっては、ほとんど削平等はおこなわず、畑の上に砕石を入れたのみということであった。そのため、遺跡の状況を確認するために試掘調査を実施した。試掘トレンチの1ヶ所で遺物が複数出土し、遺物の分布範囲が広がることが予想されたため、トレンチを拡張して発掘範囲を広げ、遺物の分布がほぼおさえられたところで終了した。

C. 調査の方法

計画された建物の基礎工事部分に試掘トレンチを設定した。建物の外周の四隅とその中間に当たる地点に、1.5×0.8mの試掘トレンチを設定した。10ヶ所を設定し、北側からTP-1～TP-10とした。TP-8でローム層から石器が出土したため拡張し、18.4㎡を調査して終了した。試掘トレンチはすべて手掘りで掘削したが、TP-8の拡張部分については事業主の協力を得て、表面の砕石のみを重機によって除去した。

調査は5月23日～6月4日の間に、9日間実施した。

D. 調査の結果

a. 層序

調査地点の層序は野尻湖周辺の丘陵で通常確認できる層序と基本的には一致するが、野尻湖付近に比べて厚さや色に若干の違いが見られた。調査の範囲と土層の柱状図は図21に示した。上面は全体に砕石が入れられており、厚いところで30cm弱の厚さであった。現状の地表面は水平ではなく、南西方向へ緩やかに下るように傾斜していた。I層は客土で、南側の一部をのぞいて、全体に分布している。ゴミが含まれていて、造成時に入れられたものと思われる。II層は耕作土と思われ、褐色土が全体に混入している。VIII層の黒色土が縄文時代以降に堆積した柏原黒色火山灰層と思われるが、TP-1、TP-8-1、TP-8-2の3ヶ所で確認できるのみである。開発予定地の西側ではVIII層が残されているが、開発予定地内ではほとんど残されていないことがわかる。このことから、ここに砕石を入れた段階ではなく、畑にする段階でVIII層の黒色土を削平したものと考えられる。よって、縄文時代や平安時代の遺物包含層はその時点で除去されたものと思われ、TP-1～6から出土した土師器などは除去した黒色土から混入したものと考えられる。野尻湖人類考古グループ(1994)の層序区分に従えば、III層はモヤ上部、IV層はモヤ下部に対比される。III、IV層はともに東側での分布が認められず、畑の造成時に削平されたものと思われる。V層は上部野尻ローム層[上II]に対比されるが、色などの違いが見出せず、細分できなかった。この層準はほぼ全体で確認された。VI層は上II最下部、VII層は黒色帯に対比されるが、いずれも野尻湖周辺に比べて色が明るい印象である。またVII層からは下位の地層に含まれる赤褐色スコリアなどが混入する。他の遺跡の例から、広域火山灰ATの降灰はVI層中と考

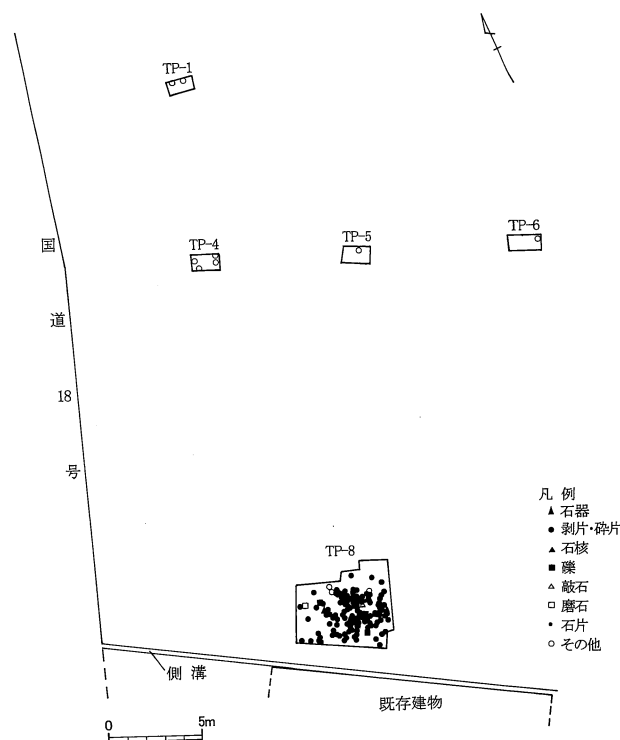


図22 大道下遺跡の遺物分布(凡例は図23～27に共通する)

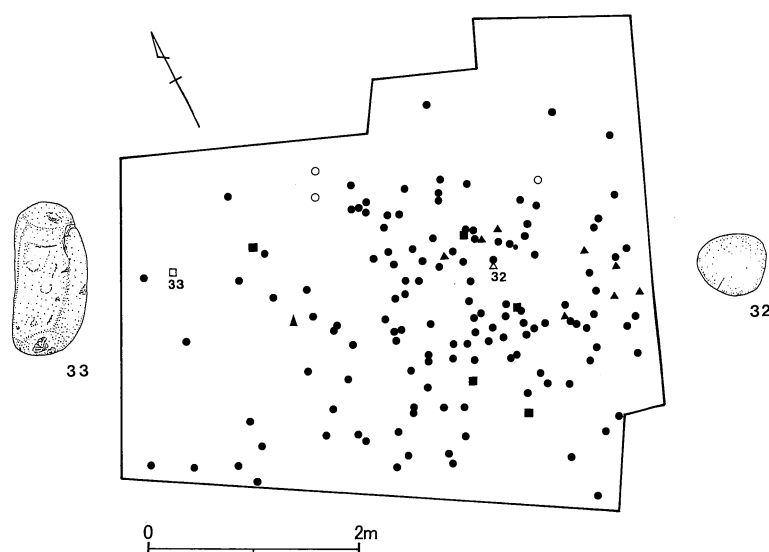


図23 大道下遺跡 TP-8の遺物分布

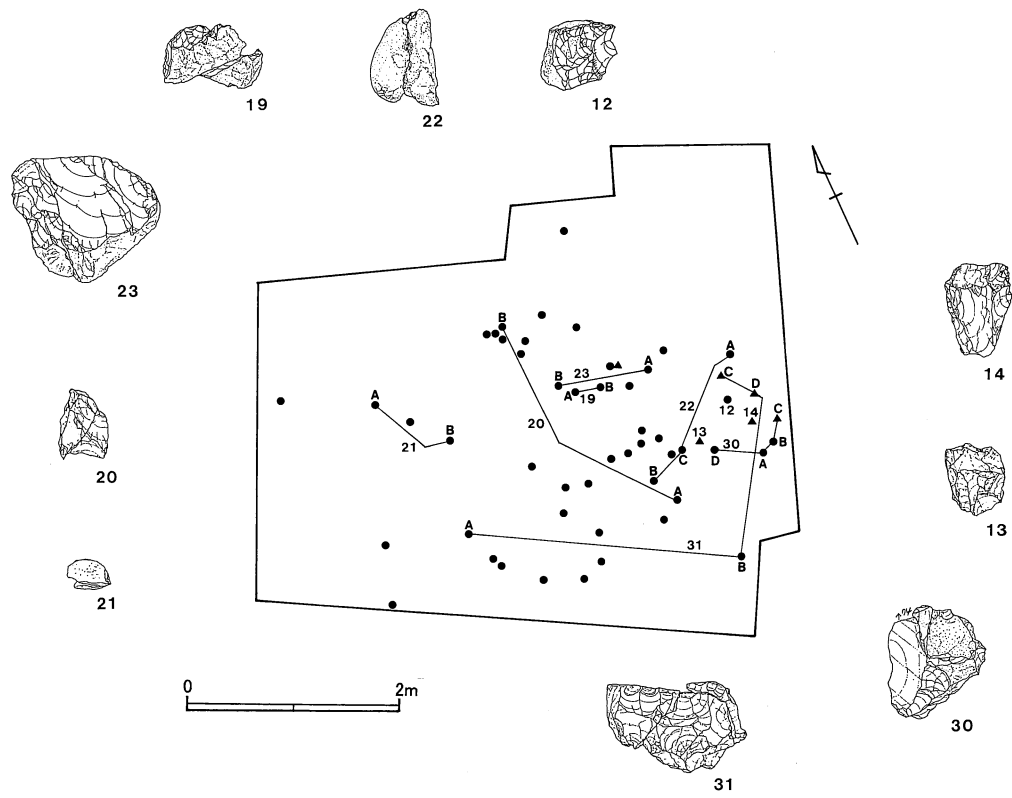


図24 石材別の遺物分布 (チャート)

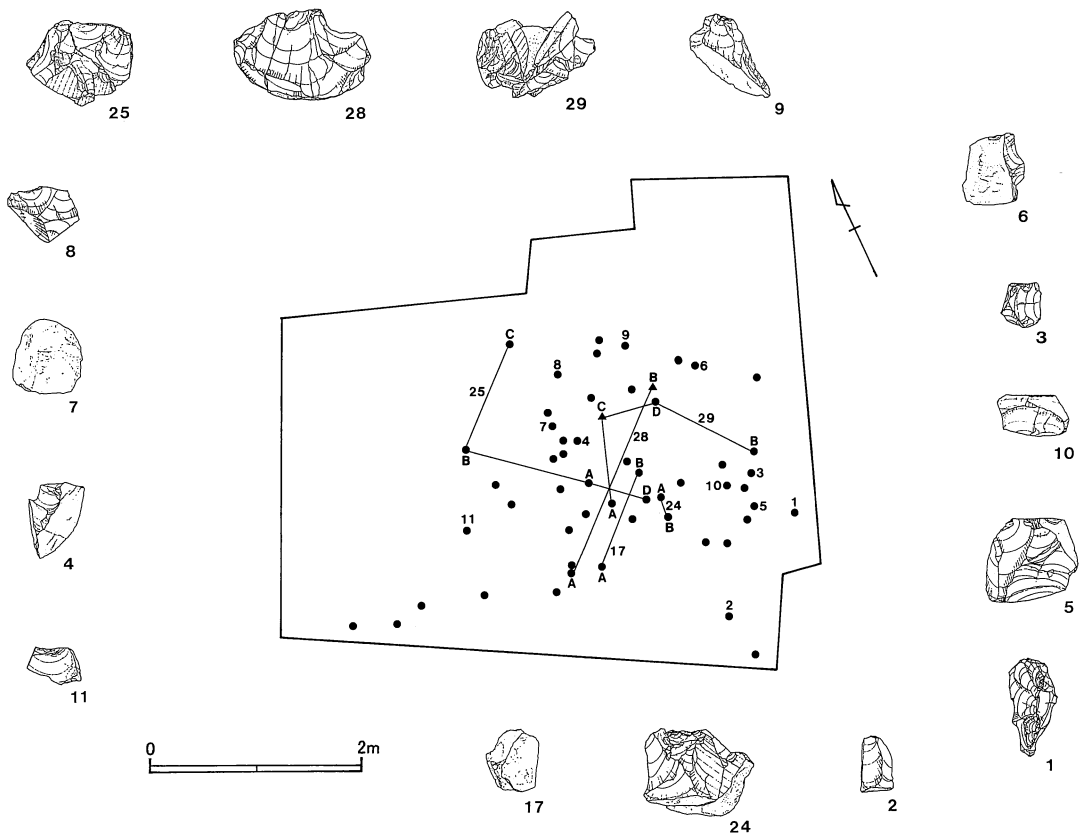


図25 石材別の遺物分布 (凝灰岩)

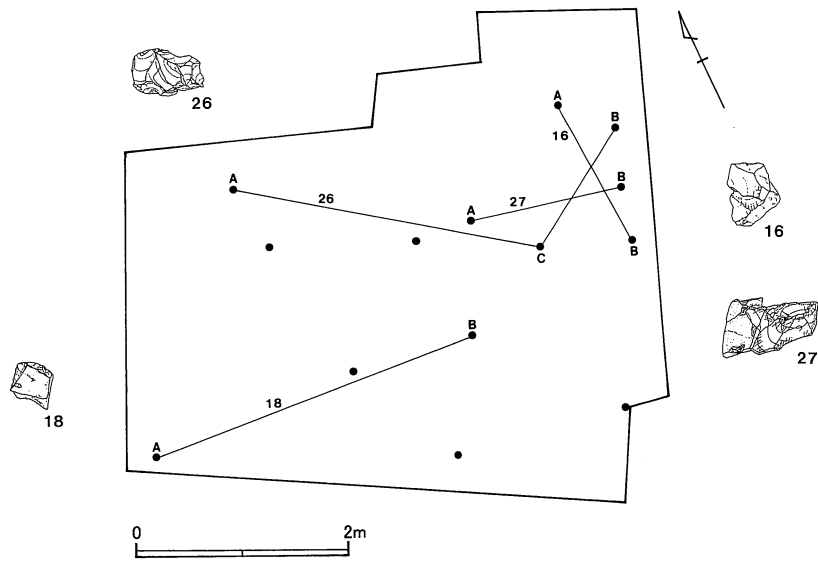


図26 石材別の遺物分布（凝灰質頁岩）

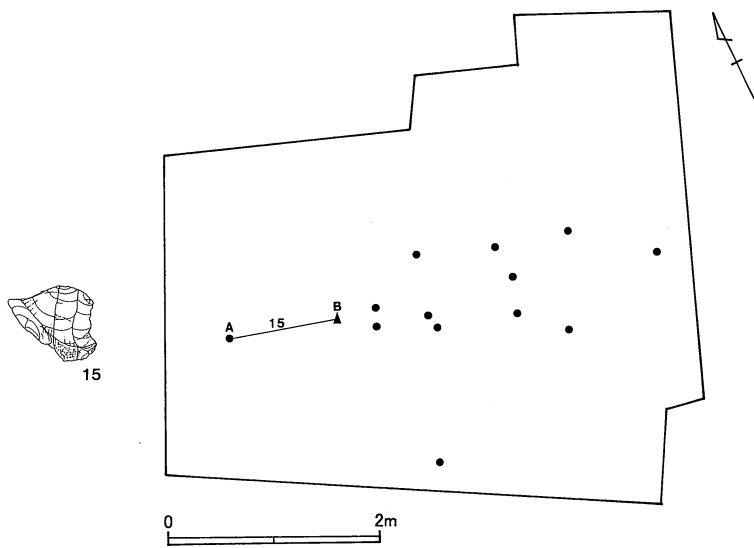


図27 石材別の遺物分布（無斑晶質安山岩）

表8 大道下遺跡 剥片石器の石材別点数

石材	Ch		Tu		TS		An		合計
	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)	
点数	55	40.1%	55	40.1%	14	10.3%	13	9.5%	137
重量(g)	604.9	46.7%	531.2	41.0%	81.0	6.2%	79.3	6.1%	1296.4
1点の平均重量	11.0		9.7		5.8		6.1		

表9 大道下遺跡 剥片石器の石材別石器器種

石材	挟入石器	石核	石刃	剥片	破片	合計
Ch		6		46	3	55
Tu		2	1	51	1	55
TS				13	1	14
An	1			10	2	13
合計	1	8	1	120	7	137
比率(%)	0.7	5.9	0.7	87.6	5.1	100

表10 大道下遺跡 石器の接合リスト

図番号	母岩	遺物番号			
		出土層準			
15	An-1	44	45		
		V上	V中		
16	TS-1	22	143		
		III中	VII中		
17	Tu-5	57	62		
		V中	V上		
18	TS-1	3	109		
		IV上	VI中		
19	Ch-1	30	94		
		IV下	VI上		
20	Ch-1	80	89		
		V上	V中		
21	Ch-1	42	46		
		V下	VI中		
22	Ch-3	25	69	70	
		V中	III下	V上	
23	Ch-1	27	92		
		V中	V下		

図番号	母岩	遺物番号			
		出土層準			
24	Tu-5	65	113		
		V上	V上		
25	Tu-5	16	39	90	112
		IV中	VI中	VI上	VI上
26	TS-1	20	86	138	
		III上	VII上	VII上	
27	TS-1	95	119		
		VI上	VII上		
28	Tu-3	55	139		
		V上	VI中		
29	Tu-5	61	72	93	97
		V中	VI上	V下	V下
30	Ch-2	74	117	130	133
		V上	V下	VII中	VII上
31	Ch-2	52	84	100	101
		V中	V下	VII上	VII上

表11 大道下遺跡 石器の層準別点数と割合

	VIII層		III層			IV層			V層			VI層			VII層		合計
	VII下	III上	III中	III下	IV上	IV中	IV下	V上	V中	V下	VI上	VI中	VI下	VII上	VII中		
点数(層準細分別) 単位:点	1	7	3	2	2	7	12	15	19	12	16	16	5	13	9	139	
比率(層準細分別) 単位:%	0.7	5.0	2.2	1.4	1.4	5.0	8.6	10.8	13.7	8.6	11.5	11.5	3.6	9.4	6.5		
点数(層準別) 単位:点	1		12			21			46			37			22		139
比率(層準別) 単位:%	0.7		7.2			15.0			33.1			26.6			15.9		

えられる。II層からは土師器と陶磁器が出土し、III～VII層からは石器や礫が出土している。

b. 出土遺物の概要

出土した遺物の総点数は156点で、内訳は土師器7点、陶磁器3点、砥石1点、石器139点、石片1点、礫5点である。石片とは粗粒な安山岩の小破片で、石器とは考え難いが、ローム層中に包含されているため人為的に持ち込まれた可能性もあると考え、参考資料としてとり上げたものである。全遺物のデータは表14～16に示した。出土層準を記録する際、それぞれの層準中を上中下に細分して記録した。これは色などの違いによって分けたものではなく、相対的な位置の記録である。最も遺物が多く出土している層準はV層の中部であるが、概ねV層上部からVI層中部までの間に遺物が集中する傾向がある(表11)。ただし後で述べるが、出土層準が大きく異なる遺物の接合資料が多数存在することから、堆積過程または堆積後において大きく移動している状況がうかがえる。

剥片石器の石材は点数が多い順にチャート、凝灰岩、凝灰質頁岩、無斑晶質安山岩の4種類である(表8)。黒曜石が含まれていないことはこの地域の旧石器時代遺跡としては珍しく、特徴と言えよう。接合資料が17点あるが、その内、チャートが7点、凝灰岩が5点を占めており、重量の大きな石核に剥片が接合する例があり、石核の割合が高いために遺物の平均重量も大きくなっている。母岩別分類は肉眼により、表面の状況と色を観察し

ておこなった。分類の方法は図28に示した。これによりチャートは3分類、凝灰岩は6分類、無斑晶質安山岩は2分類し、凝灰質頁岩は1種類のみとした。チャートは黒っぽく、節理が多くて質が良くない印象で、この地域でよく用いられる赤色や青色系のものではない点も特徴として挙げることができる。

石器組成では、製品（ツール）が1点のみで、石核が8点、石刃・剥片が121点、碎片が7点である（表9）。

礫は5点が出土した。そのデータを示した（表16）。この属性についての説明は、大久保南遺跡の記述を参照されたい。礫はすべて小形で、これらは礫群を構成する焼け礫ではない。

c. 遺物の分布

土師器はTP-1、4、6、8から出土し、陶磁器はTP-5、8、砥石はTP-1から出土した。遺物番号TP-8-23はⅧ層から出土したが、それ以外はⅠまたはⅡ層から出土しており、いわゆる攪乱層からの出土ということになる。先にも述べたが、本来の遺物包含層であるⅧ層はすでに削平されていると考えられることから、これらの遺物が出土したトレンチについてはこれ以上拡張する必要はないと判断した。

石器類はTP-8からのみ出土した。遺物はⅧ層と、Ⅲ層からⅦ層まで出土しているが、上層と下層の石器が接合する例がいくつかあることや、上層と下層の石器に、使われている石材の違いが見られないことなどから、ここから出土した石器類はすべて同時期のものと判断した。石器の分布は図23に示した。TP-8の調査範囲の北東側、北西側で遺物の分布が稀薄となっていること、及び、TP-10から遺物が出土していないことから、北側の遺物の分布はほぼこのあたりまでと考えられる。なお、東側は建物があるためこれ以上拡張はできず、南側は開発範囲の境界までとしたためこれ以上拡張しなかった。

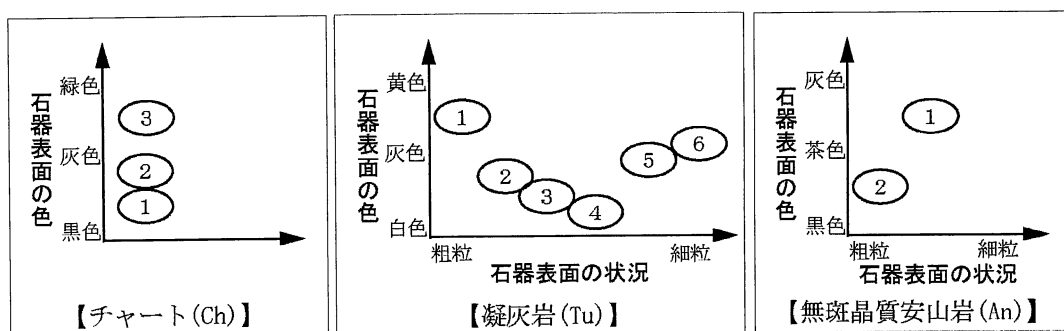
石材別に遺物の分布を見ると、チャートと凝灰岩の石器が同じような範囲で分布しており（図24、25）、ともに2～3m間の接合例がある。凝灰質頁岩は調査区内全体に散漫に分布しているが、接合する割合が高く、また、図番号26が3.6mの距離間で接合しているなど、比較的遠距離での接合が見られる（図26）。無斑晶質安山岩は東西方向に帯状の分布が見られる（図27）。

接合資料では異なる層準から出土した資料の接合が目立つ。接合資料について、各遺物の出土層準を示した（表10）が、Ⅲ層とⅦ層の遺物が接合する例が2例あるなど、遺物の移動が大きいことがわかる。現場での地層の観察では、地層の大きな乱れは確認できなかった。

層準別で石器の出土点数を見ると、Ⅴ層が33.1%、Ⅵ層が26.6%、Ⅶ層が15.9%の順である（表11）。さらに各層を相対的に上部、中部、下部に分けて細分してその割合を見たところ、Ⅴ層中部（Ⅴ中と表記、以下同じ）が13.7%と最も高いが、それほど大きな差はなく、Ⅳ下～Ⅶ上までが高い割合を示している。この状況から、層準と出土点数の関係で本来の生活面を決めることは困難である。

d. 出土遺物

33点を図化し（図29～38）、各遺物のデータと特徴を示した（表12、13）。図番号1～14、32、33は単品の石器で、15～31までの17点は接合資料である。よって図に示したのは出土した石器139点の内、60点である。図29～38では、遺物に1からの通し番号を図番号として付け、その下に遺物名の略号、石材名の略号、出土層準、遺物番号の順に記述した。



石材名	略号	番号					
		1	2	3	4	5	6
チャート	Ch	暗灰 (N3/)	灰 (N4/)	緑灰 (7.5GY5/1)			
凝灰岩	Tu	灰黄 (2.5Y7/2)	灰白 (5Y8/2)	灰白 (2.5Y8/2)	灰白 (5Y8/1)	灰 (7.5Y6/1)	灰 (N6/)
凝灰質頁岩	TS	灰 (N4/)					
無斑晶質安山岩	An	黒褐 (2.5Y3/2)	黄灰 (2.5Y5/1)				

図28 母岩別分類の方法

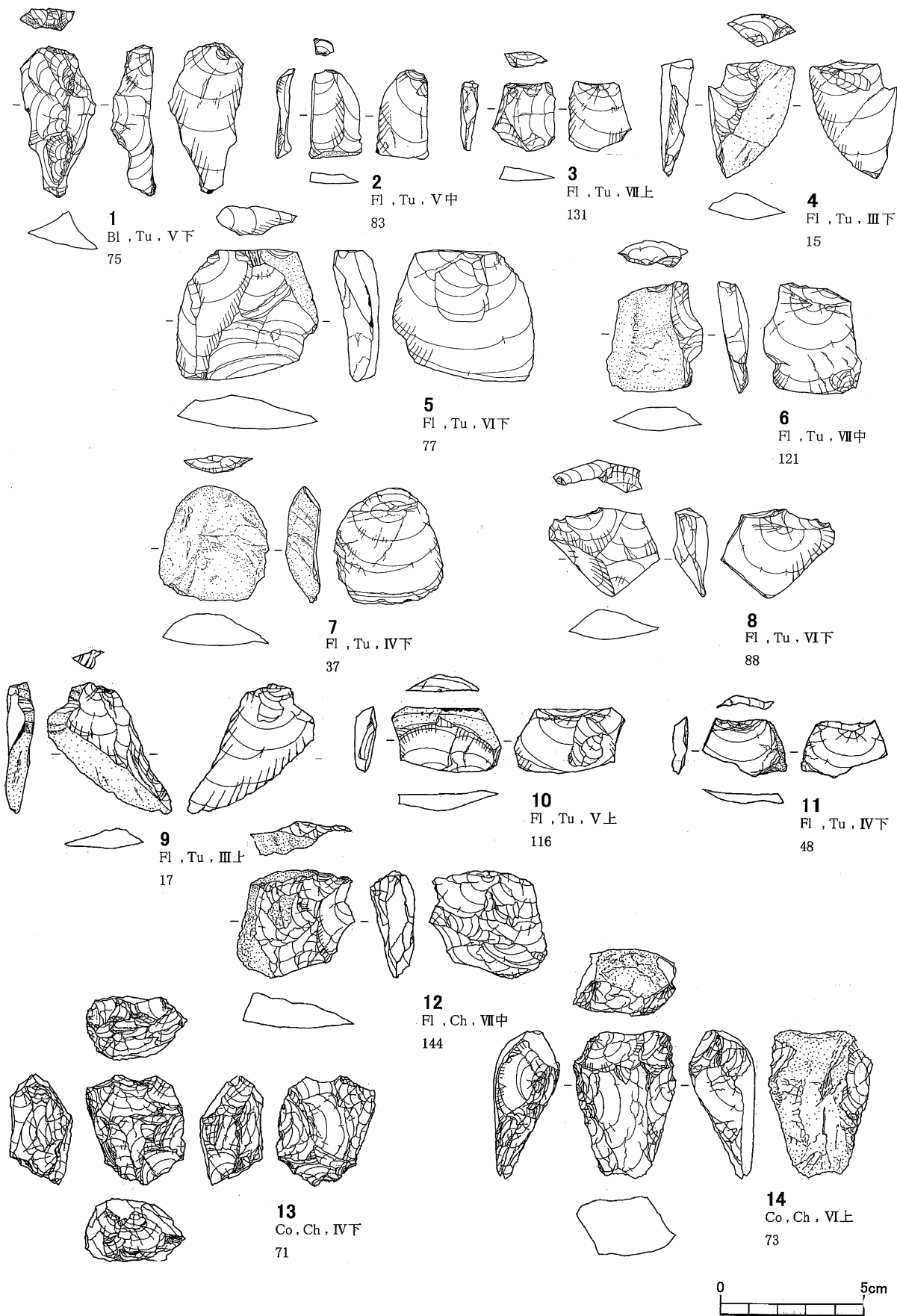
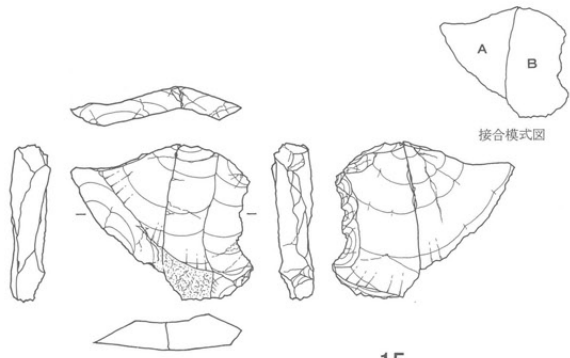
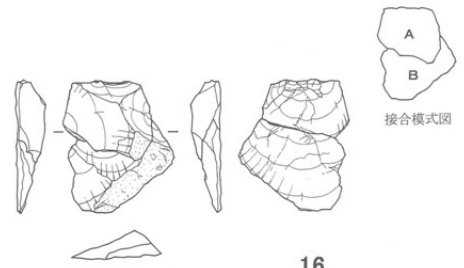


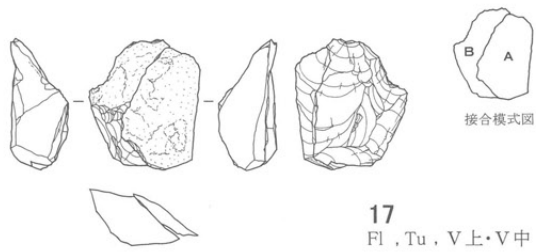
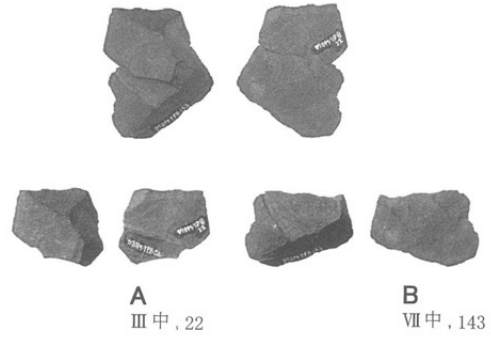
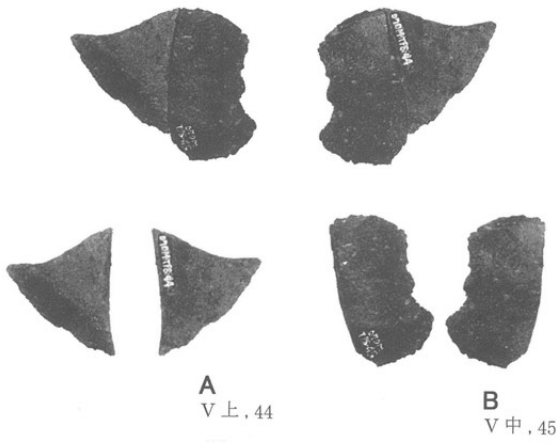
図29 大道下遺跡の主な出土遺物 (1) (石刃, 剥片, 石核)



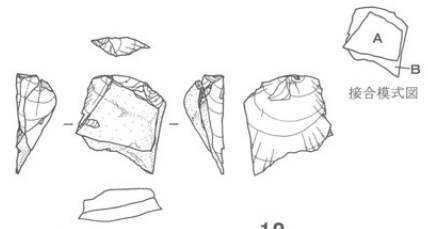
15
NS, An, V上・V中
44 45



16
Fl, TS, III中・VII中
22 143



17
Fl, Tu, V上・V中
57 62



18
Fl, TS, IV上・VI中
3 109

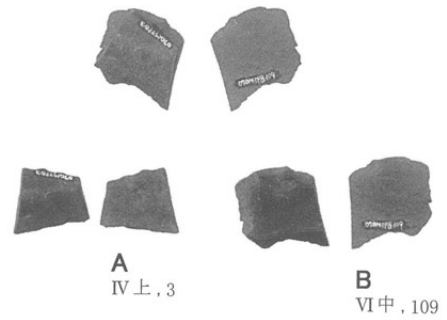
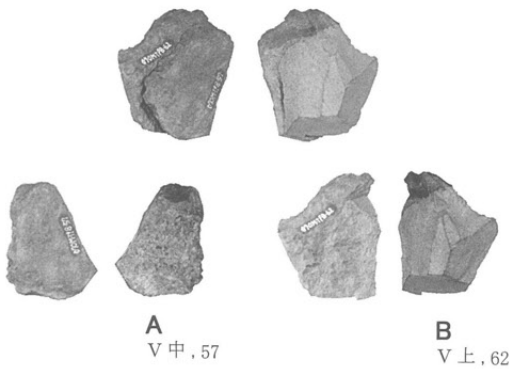
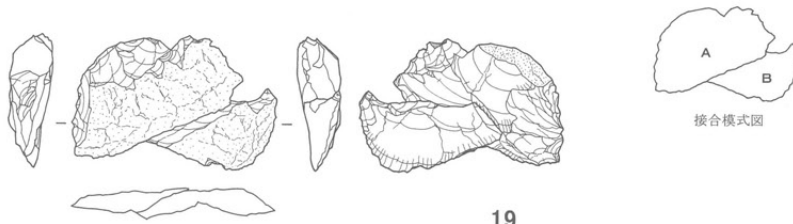
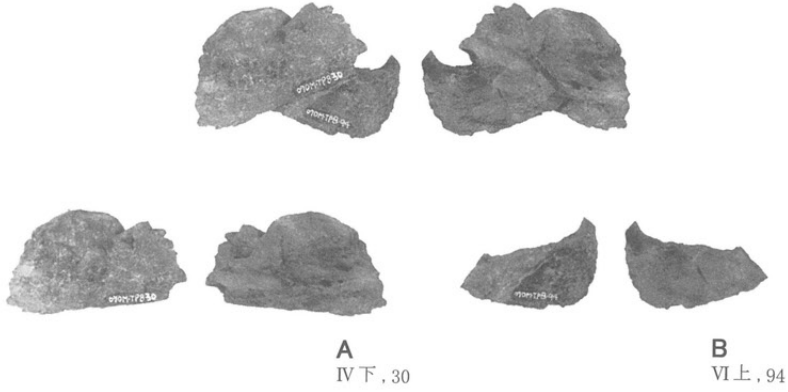


図30 大道下遺跡の主な出土遺物 (2) (抉入石器, 剥片)

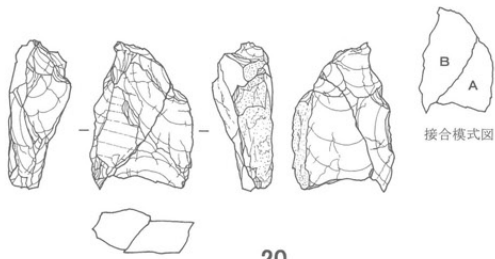


19
Fl, Ch, IV下・VI上
30 94

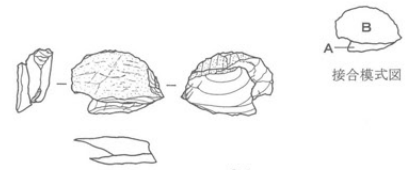


A
IV下, 30

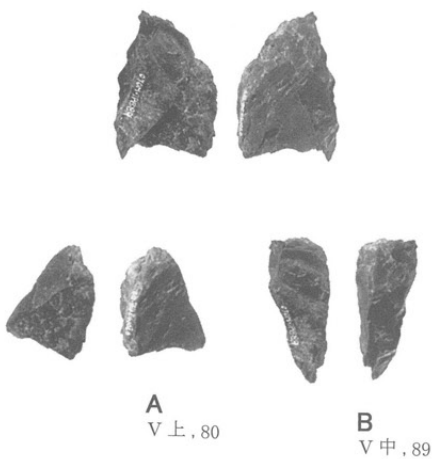
B
VI上, 94



20
Fl, Ch, V上・V中
80 89

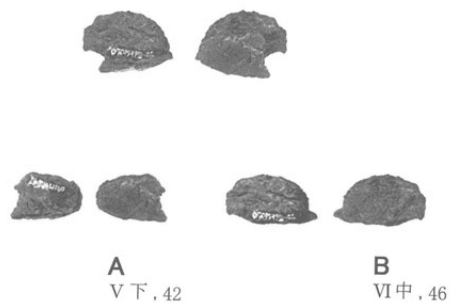


21
Fl, Ch, V下・VI中
42 46



A
V上, 80

B
V中, 89

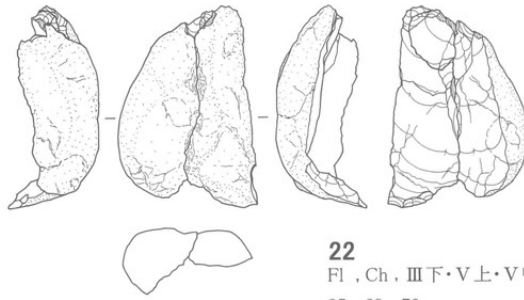
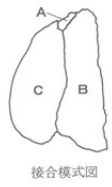


A
V下, 42

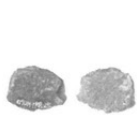
B
VI中, 46



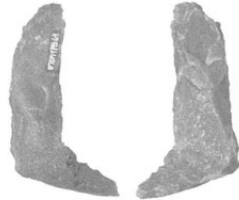
図31 大道下遺跡の主な出土遺物(3)(剥片)



22
Fl, Ch, III下・V上・V中
25 69 70



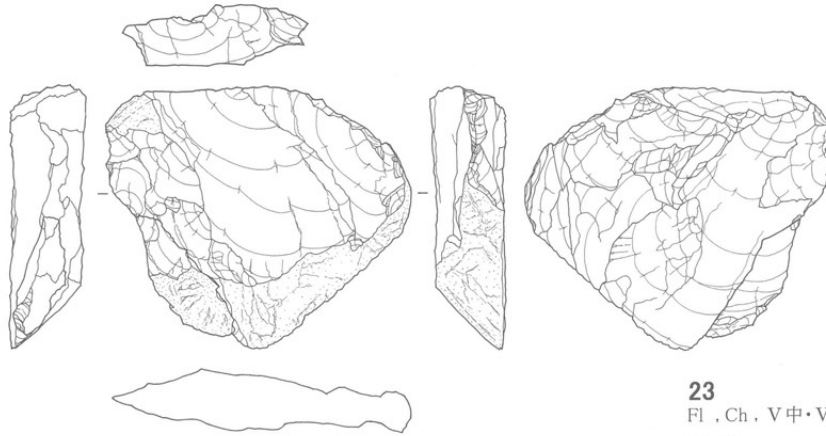
A
V中, 25



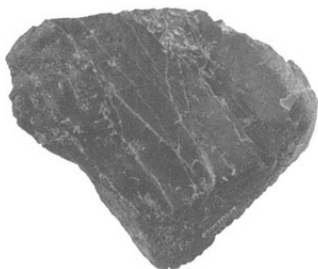
B
III下, 69



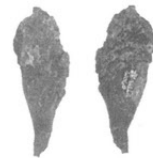
C
V上, 70



23
Fl, Ch, V中・V下
27 92



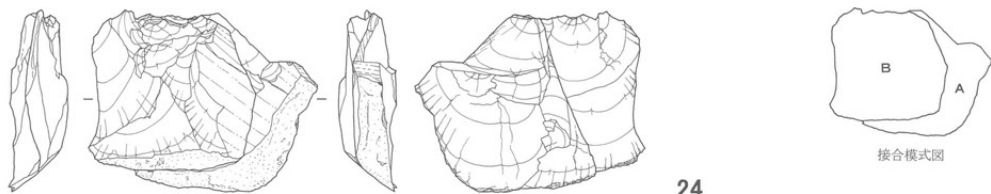
A
V中, 27



B
V下, 92

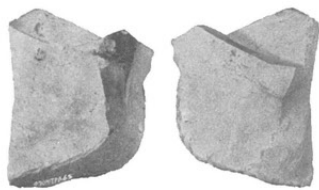
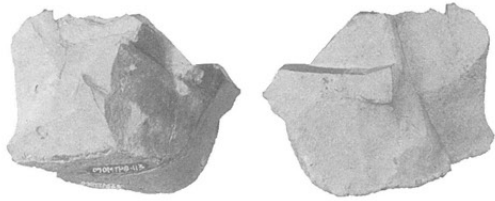


図32 大道下遺跡の主な出土遺物（4）（剥片）



24
Fl, Tu, V上
65 113

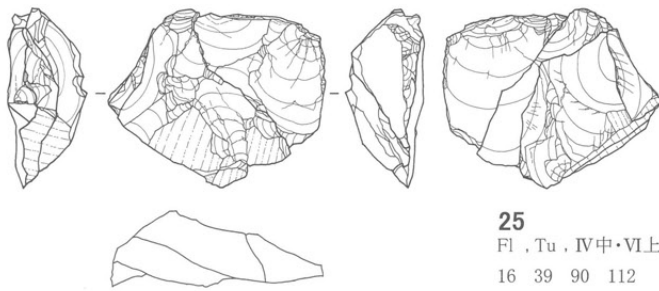
接合模式図



A
V上, 65

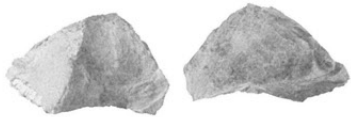
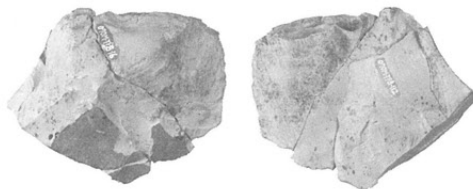


B
V上, 113

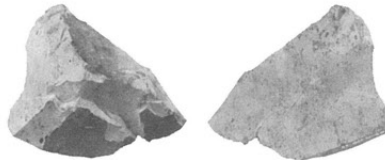


25
Fl, Tu, IV中・VI上・VI中
16 39 90 112

接合模式図



A
IV中, 16



B
VI中, 39



C
VI上, 90



D
VI上, 112



図33 大道下遺跡の主な出土遺物 (5) (剥片)

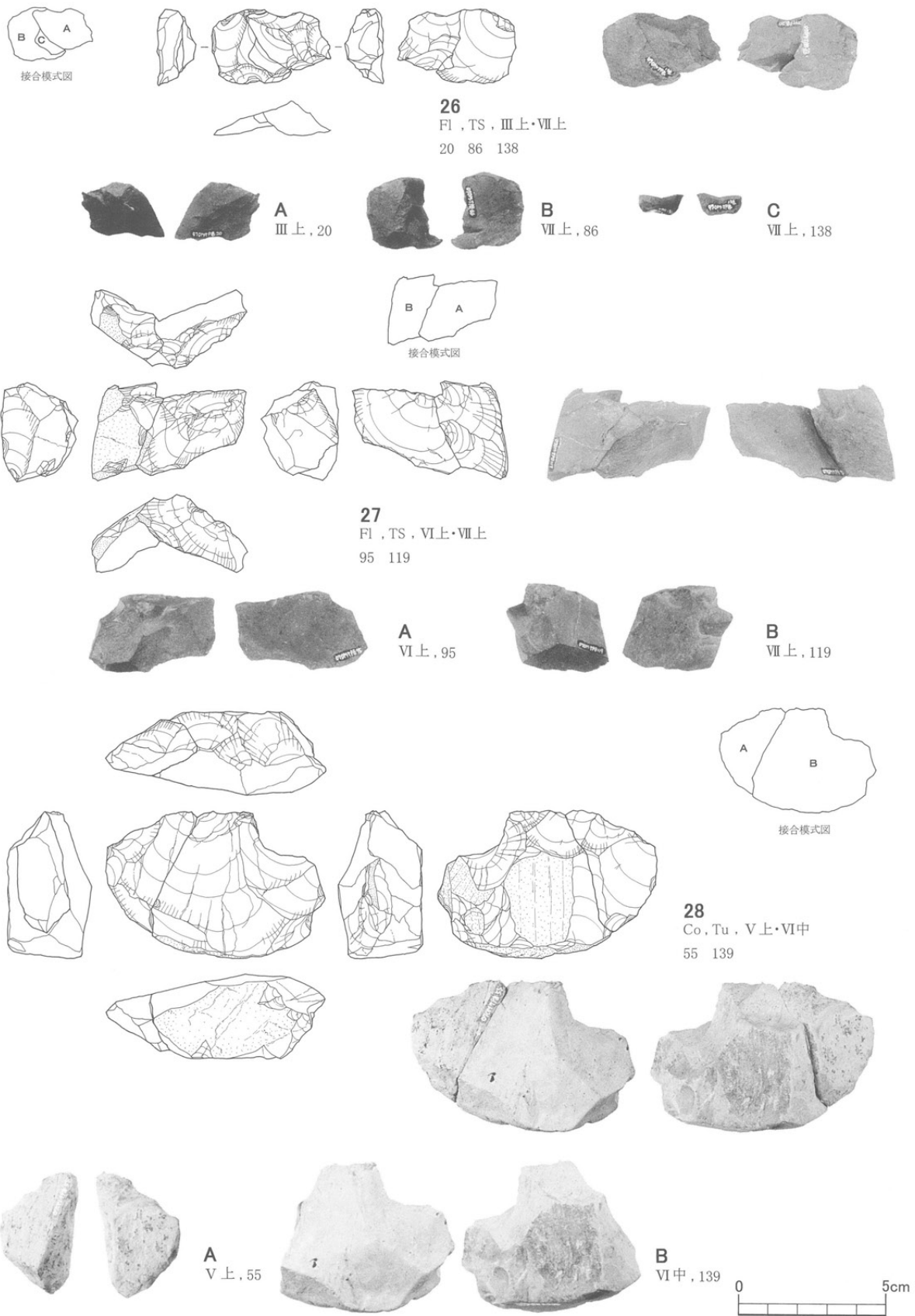
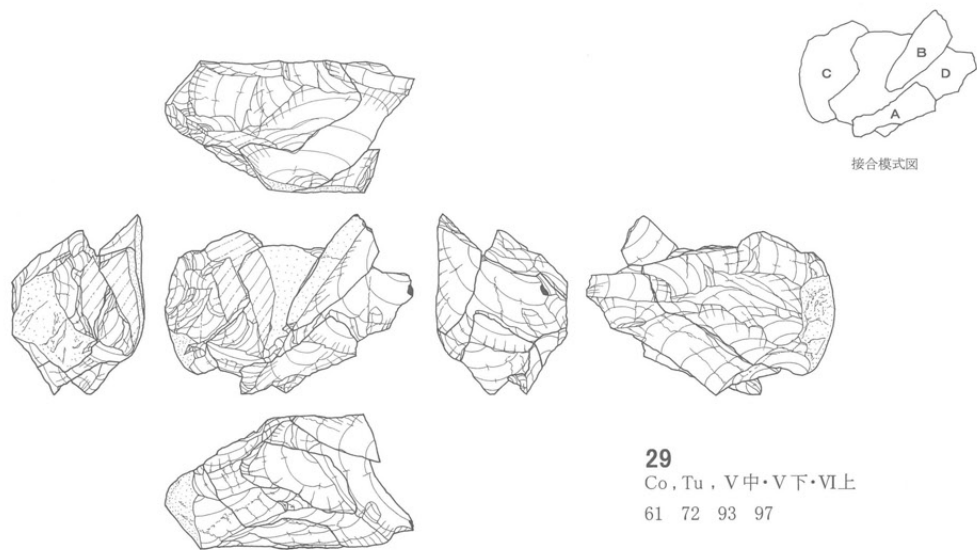
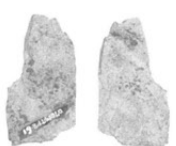
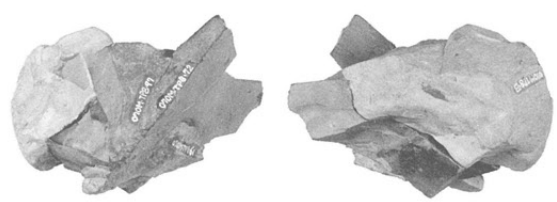


図34 大道下遺跡の主な出土遺物（6）（剥片，石核）



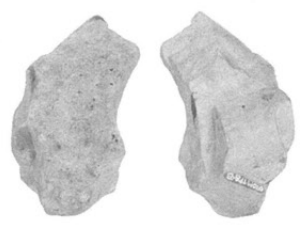
29
Co, Tu, V中・V下・VI上
61 72 93 97



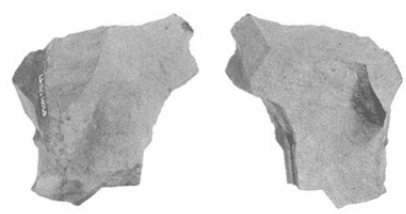
A
V中, 61



B
VI上, 72



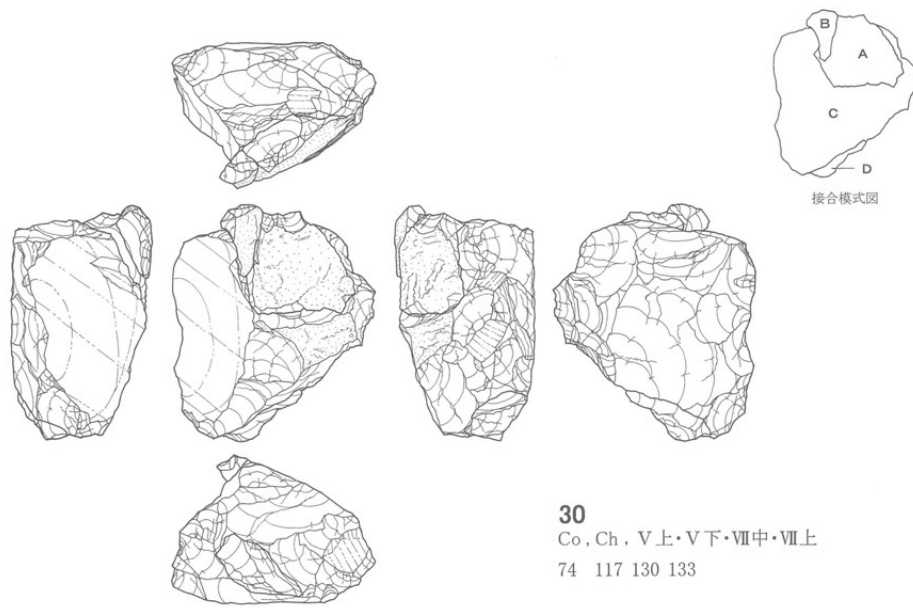
C
V下, 93



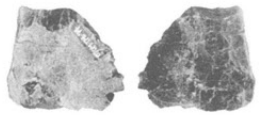
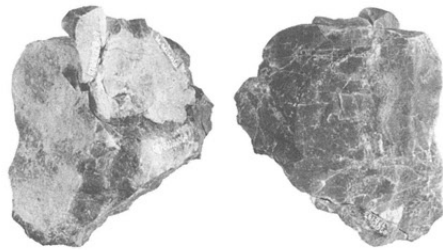
D
V下, 97



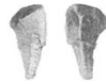
図35 大道下遺跡の主な出土遺物 (7) (石核)



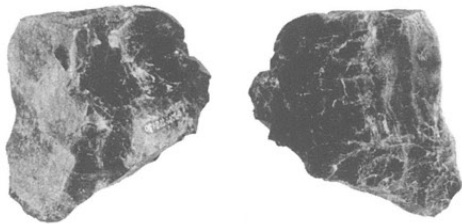
30
Co, Ch, V上・V下・VII中・VII上
74 117 130 133



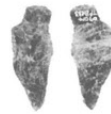
A
V上, 74



B
V下, 117



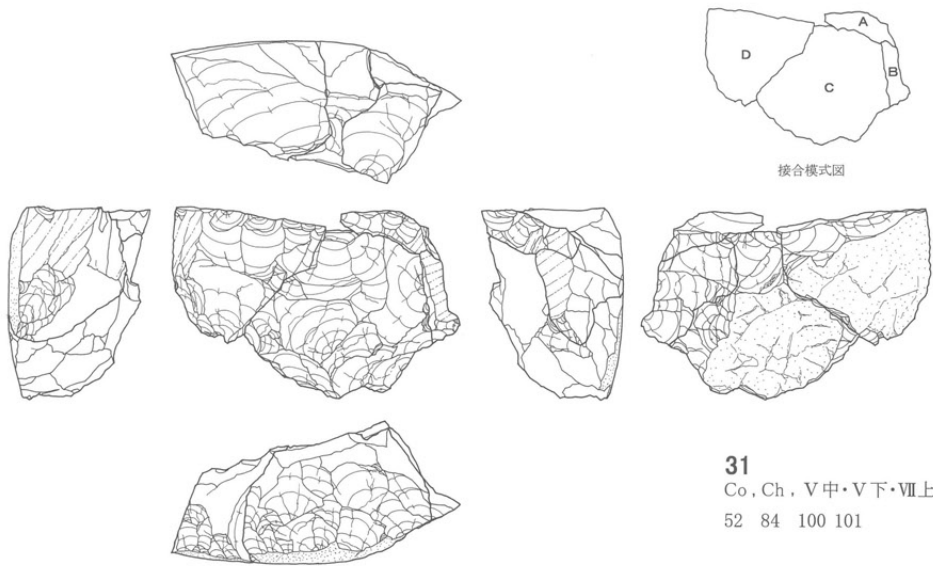
C
VII中, 130



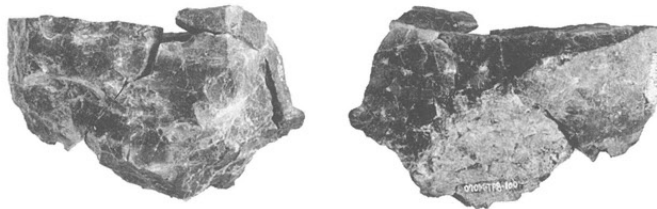
D
VII上, 133



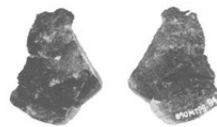
図36 大道下遺跡の主な出土遺物 (8) (石核)



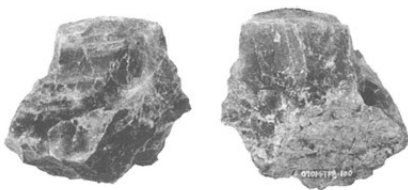
31
Co, Ch, V中・V下・VII上
52 84 100 101



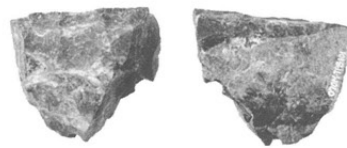
A
V中, 52



B
V下, 84



C
VII上, 100



D
VII上, 101



図37 大道下遺跡の主な出土遺物(9)(石核)

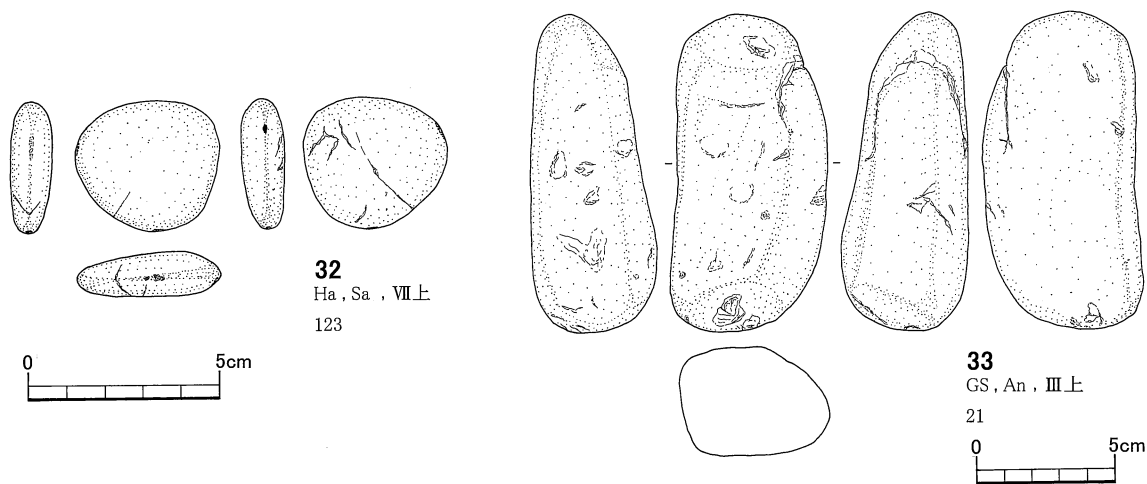


図38 大道下遺跡の主な出土遺物 (10) (敲石, 磨石)

表12 大道下遺跡 主な石器の観察表 (1)

図番号	トレンチ	遺物番号 A	遺物番号 B	遺物番号 C	遺物番号 D	遺物名	器種の略号	石材	層準	石器の特徴
1	TP8	75				稜付き石刃	Fl	Tu	V下	複剥離面打面を加撃して剥離された稜付き石刃。背面にはこの石刃の剥離方向に直交する方向の剥離痕によりトサカ状の稜がつくられている。剥離角は103度。
2	TP8	83				剥片	Fl	Tu	V中	単剥離面打面を加撃して剥離された縦長の剥片で、末端部に自然面を残す。剥離角は120度。側面に折断がみられる。
3	TP8	131				剥片	Fl	Tu	VII上	単剥離面打面を加撃して剥離された幅広の剥片で、末端部が蝶番剥離となっている。剥離角は92度。
4	TP8	15				剥片	Fl	Tu	III下	単剥離面打面を加撃して剥離された縦長の剥片。剥離角は107度。背面に自然面を多く残す。
5	TP8	77				剥片	Fl	Tu	VI下	単剥離面打面を加撃して剥離された幅広の剥片で、末端部が蝶番剥離となっている。剥離角は100度。
6	TP8	121				剥片	Fl	Tu	VII中	単剥離面打面を加撃して剥離された剥片で、背面に自然面を多く残す。剥離角は131度。
7	TP8	37				剥片	Fl	Tu	IV下	単剥離面打面を加撃して剥離された幅広の剥片で、末端部が蝶番剥離となっている。剥離角は135度。背面はすべて自然面で、母岩は円礫。
8	TP8	88				剥片	Fl	Tu	VI下	単剥離面打面を加撃して剥離された幅広の剥片。剥離角は134度。
9	TP8	17				剥片	Fl	Tu	III上	平坦な節理面を加撃して剥離された横長の剥片で、末端部に自然面を残す。剥離角は105度。
10	TP8	116				剥片	Fl	Tu	V上	単剥離面打面を加撃して剥離された横長の剥片で、末端部が蝶番剥離となっている。打面の背面側の縁辺に連続した微細な剥離痕がみられる。
11	TP8	48				剥片	Fl	Tu	IV下	単剥離面打面を加撃して剥離された横長の剥片で、バルブが発達する。剥離角は116度。側面に自然面を残す。
12	TP8	144				剥片	Fl	Ch	VII中	単剥離面打面を加撃して剥離された幅広の剥片で、剥離角は114度。打面付近と側面に自然面を残す。
13	TP8	71				石核	Co	Ch	IV下	小形で幅広の剥片を剥離した石核で、表裏面ともに上下からと90度打面を変えた両側面からの剥離痕がみられる。剥離面を打面として表裏で交互に剥離されている。
14	TP8	73				石核	Co	Ch	VI上	自然面を多く残す石核で、自然面を加撃して小形の剥片を剥離している。円礫が分割されたもので、剥片剥離があまり進行していない。

表13 大道下遺跡 主な石器の観察表(2)

図番号	トレンチ	遺物番号 A	遺物番号 B	遺物番号 C	遺物番号 D	遺物名	器種の略号	石材	層準	石器の特徴
15	TP8	44	45			挟入石器	NS	An	V上・V中	複剥離面打面を加撃して剥離された横長の剥片の腹面側に2つの挟入部がつくり出されている。剥片の剥離角は110度。挟入部の調整角は110度と108度である。2点は、約1m離れ、ともにV層中から出土した。
16	TP8	22	143			剥片	Fl	TS	Ⅲ中・Ⅶ中	複剥離面打面を加撃して剥離された剥片が二分された資料。水平距離で1.5m離れ、深度の差が45cm、Ⅲ層とⅦ層から出土している。意図して割った可能性は低いと思われる。
17	TP8	57	62			剥片	Fl	Tu	V上・V中	背面全体が自然面の剥片Aと、側面に複数の剥離面をもつ剥片Bの接合資料で、接合面は節理面であり、剥片剥離時に偶発的に割れた可能性がある。出土層準はほぼ同じで、2点間の距離は90cm。
18	TP8	3	109			剥片	Fl	TS	Ⅳ上・Ⅵ中	背面全体が自然面の剥片Aと幅広の剥片Bの接合資料。Aは打面が残っていないが、Bは単剥離面打面が残り、剥離角は95度。出土層準が異なり、2点間の距離は3.2m。
19	TP8	30	94			剥片	Fl	Ch	Ⅳ下・Ⅵ上	自然面打面を加撃して得られた剥片が二分され、それが接合したもの。主要剥離面は一連の剥離面で、剥離時に偶発的に二分されたものと思われる。Aの剥離角は126度。背面に自然面を多く残す。出土層準はⅣ層とⅥ層で、2点間の距離は25cm。
20	TP8	80	89			剥片	Fl	Ch	V上・V中	側面に自然面を残す剥片が二分されたものが接合した。出土層準はほぼ同じであるが、2点間の距離は2.3m離れている。
21	TP8	42	46			剥片	Fl	Ch	V下・Ⅵ中	横長の剥片Aに、背面全体に自然面を残す剥片Bの接合資料。打面は自然面または節理面で、剥離角はA、Bともに118度である。出土層準はV層とⅥ層で、2点間の距離は80cm。
22	TP8	25	69	70		剥片	Fl	Ch	Ⅲ下・V上・V中	小形の剥片Aと背面に自然面を残す縦長の剥片B、Cの接合資料。Bはしの字状剥片となっている。これらの母岩は鶏卵大程度の大きさで推定される。出土層準はⅢ層とV層で、AとBの距離は1.5m。
23	TP8	27	92			剥片	Fl	Ch	V中・V下	側面に自然面を残す大形の剥片。打点部は不明瞭。背面に大形の剥片の剥離痕が残る。2点の接合面は節理面であり、偶発的に割れた可能性がある。出土層準はともにV層で、2点間の距離は80cm。
24	TP8	65	113			剥片	Fl	Tu	V上	節理面を打面として剥離角98度で剥離された幅広の剥片Aと、線打面で、剥離角98度で剥離された幅広の剥片Bの接合資料。背面にともに自然面を残している。2点は同じ面を打面とする。出土層準はともにV層で、2点間の距離は20cm。
25	TP8	16	39	90	112	剥片	Fl	Tu	Ⅳ中・Ⅵ上	剥片4点の接合資料。AとBは節理面で接合しており、偶発的に割れた可能性がある。AとBを合わせた剥片は単剥離面打面を加撃、剥離角は125度。背面に節理面を残す。Cは小形の剥片で、打点部は不明瞭。Dは複剥離面打面を加撃、剥離角は99度。大形の剥片(A+B)を剥離した後、目的剥片の剥離をおこなったと思われる。出土層準はⅣ層とⅥ層で、CとDの距離は2m。
26	TP8	20	86	138		剥片	Fl	TS	Ⅲ上・Ⅶ上	幅広の剥片A、Bと砕片Cとの接合資料。砕片は節理面で割れている。AとBの剥離方向は反対方向で、剥離角はAが98度、Bが91度。出土層準はAがⅢ層、B、CがⅦ層で、AとB間の距離は3.7m。
27	TP8	95	119			剥片	Fl	TS	Ⅵ上・Ⅶ上	横長の剥片Aと背面に自然面を多く残す幅広の剥片Bとの接合資料。複剥離面打面を加撃して剥離角90度でAが剥離され、そのネガティブな剥離面を打面としてBが剥離されている。剥離角は108度。出土層準はⅥ層とⅦ層で、2点間の距離は1.5m。
28	TP8	55	139			石核	Co	Tu	V上・Ⅵ中	幅広の剥片が剥離された石核で、打面部は小形の剥片剥離によってつくり出されている。剥片の剥離角は131度。2点は剥片剥離後に割れている。出土層準はV層とⅥ層で、2点間の距離は1.9m。
29	TP8	61	72	93	97	石核	Co	Tu	V中・V下・Ⅵ上	AとCとDが接合して石核をなしており、これに剥片Bが接合する。自然面や節理面が多く、A、C、Dの接合面は節理面で、偶発的に割れた可能性がある。Bの縦長剥片は打面部が欠損する。出土層準はV、Ⅵ層で、AとB間の距離は1.5m。
30	TP8	74	117	130	133	石核	Co	Ch	V上・V下・Ⅶ中・Ⅶ上	Cの石核に3点の剥片が接合する資料。単剥離面打面を加撃して、背面全体に自然面を残す剥片Aを剥離角101度で剥離している。Bは節理で割れており、偶発的に割れた可能性がある。層準はV、Ⅶ層で、CとD間の距離は70cm。
31	TP8	52	84	100	101	石核	Co	Ch	V中・V下・Ⅶ上	CとDの石核が節理面で接合し、AとBの剥片が接合する。Bの剥片剥離のうち、その剥離面を打面として剥片剥離がおこなわれている。石核からは、打面を固定して、小形の剥片を連続して剥離する技術がみられる。裏面に自然面を残す。出土層準はV、Ⅶ層で、AとD間の距離は3m。
32	TP8	123				敲石	Ha	Sa	Ⅶ上	扁平な円礫で、突き出た部分の先端付近に弱いつぶれがみられる。
33	TP8	21				磨石	GS	And	Ⅲ上	楕円形の円礫で、磨り面は明瞭ではないものの、形態等から磨石とした。

表14 大道下遺跡 石器のリスト

図番号	TP	遺物番号	遺物名	石材	母岩	地層	標高(m)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合
18	8	3	剥片	TS	TS-1	IV 上	696.338	2.3	2.3	0.8	1.9	TP8-109
8	4	剥片	Tu	Tu-1	III 上	696.428	2.6	2.6	0.6	2.4		
8	5	剥片	Tu	Tu-5	IV 上	696.408	2.0	2.0	0.9	2.7		
8	6	剥片	Tu	Tu-5	III 上	696.548	1.6	2.7	1.2	4.2		
8	7	剥片	Ch	Ch-1	III 中	696.468	3.0	3.7	1.4	13.1		
8	8	剥片	Tu	Tu-5	VII 下	696.698	2.6	1.5	1.1	2.0		
8	9	剥片	Tu	Tu-1	IV 中	696.448	1.9	2.6	0.8	1.6		
8	10	剥片	Tu	Tu-3	III 上	696.598	2.3	3.6	1.7	7.9		
8	11	剥片	Ch	Ch-1	III 中	696.548	1.7	2.0	0.6	1.5		
8	12	剥片	An	An-2	IV 下	696.438	1.5	2.2	0.7	1.9		
8	13	剥片	Tu	Tu-5	IV 下	696.468	3.2	3.2	1.0	9.4		
8	14	剥片	Tu	Tu-1	IV 中	696.478	3.2	3.7	0.8	9.0		
4	8	15	剥片	Tu	Tu-5	III 下	696.548	4.4	2.8	1.2	9.6	
25	8	16	剥片	Tu	Tu-5	IV 中	696.508	2.7	4.3	1.8	14.5	TP8-39, 90, 112
9	8	17	剥片	Tu	Tu-2	III 上	696.678	4.5	4.3	1.0	10.8	
8	18	剥片	Ch	Ch-2	III 中	696.518	2.7	2.0	1.0	3.9		
8	19	剥片	Ch	Ch-1	IV 中	696.518	2.7	2.0	1.0	3.9		
26	8	20	剥片	TS	TS-1	III 上	696.548	2.0	2.8	1.2	4.2	TP8-86, 138
33	8	21	礫石	And	III 上	696.498	11.9	5.5	4.8	444.5		
16	8	22	剥片	TS	TS-1	III 中	696.738	2.1	2.4	0.7	2.8	TP8-143
8	24	剥片	An	An-2	IV 中	696.708	3.1	3.6	1.0	8.0		
22	8	25	剥片	Ch	Ch-3	V 中	696.478	1.6	1.2	0.6	0.9	TP8-69, 70
8	26	剥片	Ch	Ch-1	V 中	696.368	2.8	2.4	1.0	5.3		
23	8	27	剥片	Ch	Ch-1	V 中	696.388	6.6	7.9	2.1	96.9	TP8-92
8	28	砕片	Ch	Ch-1	IV 中	696.478	1.2	1.1	0.5	0.6		
8	29	砕片	An	An-2	IV 下	696.498	0.7	1.3	0.3	0.2		
19	8	30	剥片	Ch	Ch-1	IV 下	696.438	4.8	2.7	1.1	12.4	TP8-94
8	31	剥片	Tu	Tu-3	V 中	696.408	3.5	3.1	1.4	14.4		
8	32	剥片	Tu	Tu-5	IV 下	696.428	2.1	3.7	1.6	6.2		
8	33	剥片	Tu	Tu-5	V 中	696.368	2.5	1.1	0.7	0.9		
8	34	剥片	Ch	Ch-1	IV 中	696.458	2.4	2.2	0.9	3.7		
8	35	剥片	An	An-1	V 中	696.428	3.1	1.1	0.6	1.4		
8	36	剥片	Tu	Tu-3	IV 下	696.428	3.3	2.1	0.5	2.6		
7	8	37	剥片	Tu	Tu-5	IV 下	696.408	4.0	3.6	1.2	19.2	
8	38	剥片	Tu	Tu-5	V 上	696.378	3.2	1.1	0.9	1.7		
25	8	39	剥片	Tu	Tu-5	VI 中	696.178	4.3	4.5	1.5	19.6	TP8-16, 90, 112
8	40	剥片	TS	TS-1	VI 上	696.218	2.9	3.3	1.1	7.1		
21	8	42	剥片	Ch	Ch-1	V 下	696.228	1.3	1.9	0.4	0.9	TP8-46
8	43	剥片	Ch	Ch-1	IV 下	696.348	1.8	1.6	0.8	1.3		
15	8	44	剥片	An	An-1	V 上	696.278	3.2	3.0	0.9	6.0	TP8-45
15	8	45	挟入石器	An	An-1	V 中	696.338	4.1	2.4	0.9	10.3	TP8-44
21	8	46	剥片	Ch	Ch-1	VI 中	696.158	2.5	1.4	0.6	2.1	TP8-42
8	47	剥片	An	An-1	VI 中	696.168	3.3	2.3	0.9	5.2		
11	8	48	剥片	Tu	Tu-5	IV 下	696.358	2.0	2.9	0.5	2.3	
8	49	剥片	Tu	Tu-5	V 中	696.188	2.5	2.6	0.9	3.9		
8	50	剥片	Ch	Ch-1	V 中	696.198	1.7	2.9	0.7	3.2		
8	51	剥片	Ch	Ch-1	VI 中	696.208	2.2	1.7	0.9	3.1		
31	8	52	剥片	Ch	Ch-2	V 中	696.328	3.2	2.0	0.9	5.5	TP8-84, 100, 101
8	53	剥片	TS	TS-1	VII 上	696.148	2.3	2.1	0.8	2.8		
8	54	剥片	Tu	Tu-5	V 中	696.348	1.8	2.0	0.5	1.4		
28	8	55	剥片	Tu	Tu-3	V 上	696.418	4.1	5.1	1.7	17.4	TP8-139
8	56	剥片	TS	TS-1	V 下	696.298	3.6	2.0	0.9	4.6		
17	8	57	剥片	Tu	Tu-5	V 中	696.378	2.6	3.1	0.5	3.8	TP8-62
8	58	剥片	Ch	Ch-1	V 下	696.308	1.8	2.3	1.0	1.4		
8	59	剥片	Tu	Tu-5	V 中	696.388	1.2	2.2	0.3	0.4		
8	60	砕片	Ch	Ch-1	V 下	696.358	1.1	1.1	0.4	0.3		
29	8	61	剥片	Tu	Tu-5	V 中	696.348	2.0	3.5	0.6	2.7	TP8-72, 93, 97
17	8	62	剥片	Tu	Tu-5	V 上	696.458	2.7	3.3	1.2	8.0	TP8-57
8	63	剥片	Ch	Ch-1	V 上	696.428	2.6	1.6	0.6	2.6		
8	64	剥片	Tu	Tu-5	V 上	696.428	4.2	4.3	1.1	13.3		
24	8	65	剥片	Tu	Tu-5	V 上	696.448	4.7	4.3	1.2	18.2	TP8-113
8	66	剥片	Ch	Ch-1	V 上	696.408	1.3	1.1	0.8	1.2		
8	67	剥片	Ch	Ch-1	IV 中	696.508	3.4	2.4	0.1	6.0		
22	8	69	剥片	Ch	Ch-3	III 下	696.588	4.9	2.9	1.9	11.7	TP8-25, 70
22	8	70	剥片	Ch	Ch-3	V 上	696.488	4.7	2.1	1.9	17.2	TP8-25, 69
13	8	71	石核	Ch	Ch-1	IV 下	696.558	3.3	3.8	2.2	28.5	
29	8	72	剥片	Tu	Tu-5	VI 上	696.318	3.4	1.6	0.8	3.0	TP8-61, 93, 97
14	8	73	石核	Ch	Ch-1	VI 上	696.338	5.1	3.5	2.2	41.8	
30	8	74	剥片	Ch	Ch-2	V 上	696.538	3.0	3.5	1.0	9.7	TP8-117, 130, 133
1	8	75	稜付き石刃	Tu	Tu-5	V 下	696.388	5.3	2.5	1.5	12.8	

表15 大道下遺跡 古代以降の遺物リスト

図番号	TP	遺物番号	遺物名	層準	標高(m)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	1	1	土師器	II 上	696.918	1.8	3.2	0.6	2.7	
1	1	2	砥石	II 中	696.708	3.1	2.8	0.7	6.5	
4	1	1	土師器	II 下	696.568	1.2	1.2	0.7	1.1	
4	2	1	土師器	II 下	696.468	2.0	2.6	0.9	4.3	
4	3	1	土師器	II 中	696.528	1.7	2.2	0.6	2.3	
4	4	1	土師器	II 中	696.548	1.4	1.9	0.5	1.1	口縁

図番号	TP	遺物番号	遺物名	層準	標高(m)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
5	1	1	磁器	II 中	697.008	2.7	2.1	0.7	3.5	
6	1	1	土師器	I 中	697.518	1.6	2.0	0.5	1.3	口縁
8	1	1	陶器	II 上	696.958	2.9	2.0	0.5	3.7	
8	2	1	磁器	II 上	696.978	2.1	2.1	0.3	1.4	
8	23	1	土師器	VII 中	696.848	4.1	3.1	0.8	8.5	

表16 大道下遺跡 礫の属性表

TP	遺物番号	遺物名	層準	標高(m)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	割れあり○なし×	割れの割合%	焼けあり○なし×	焼け(3段階)	自然面の焼け	自然の焼け%	割れ面の焼け	割れ面の焼け%	平面形(長短)	平面形(角丸)
8	41	礫	V 下	696.268	1.4	0.8	0.5	0.3	○	80	×						長	角
8	68	礫	IV 中	696.508	1.8	1.2	0.7	1.1	○	80	○	1	○	80	○	20	長	角
8	82	礫	VII 中	696.258	1.7	0.7	0.6	0.7	○	40	×						長	角
8	108	礫	VI 中	696.228	2.2	2.7	1.6	9.1	○	60	×						長	短
8	148	礫	VII 中	696.158	5.8	3.9	2.6	56.0	○	30	×						短	角

表17 大道下遺跡 礫の平均値と割合

長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	割れの割合(%)	焼けの割合(%)	焼け(3段階)
2.6	1.9	1.2	13.4	100	20	1

長	3点	60%	角	5点	100%
短	2点	40%	丸	0点	0%

1は稜付き石刃の形態をしているが、ほかに石刃技法による石刃は出土していないため、この石器は石刃技法に伴うものではない可能性が高い。2～12は剥片である。全体に幅広の剥片で、長さが幅の2倍以上の縦長剥片は少なく、全体に縦と横の長さが近い剥片が多い。比較的大形の剥片は背面や側面に自然面があり、それらは主に単剥離面を加撃して剥離されており、石器製作の初期段階の剥離による剥片の可能性がある。13、14は石核である。13からは剥離面を打面として表裏交互に剥離し、打面を90度替えて剥離する技術がうかがえる。14は自然面を打面としている。15～31は接合資料で、その内、15～27は主に剥片同士の接合で、28～31は石核に剥片が接合するものである。15は挟入石器で、横長の剥片の腹面側に挟入部が作り出されている。15～20は割れ面の状況から偶発的に割れたものと見られる。22からは母岩の大きさが推定できる。24は同じ打面を加撃して剥離された2点の剥片の接合資料である。27はAの剥離の後、その剥離面を打面としてBが剥離されている。28、29の石核は偶発的に割れたものと思われる。30は自然面を除去するような剥片剥離の例である。31の石核の剥離痕から、打面を固定して、単剥離面打面を加撃して連続して小形の剥片を剥離する技術が見られる。これら接合資料の多くには自然面が見られる。また、節理面で割れているものもあり、それらは偶発的に割れたものと推測できる。接合資料は多いものの、剥片剥離が復元できる接合例は乏しい。32は小形の扁平な敲石で、弱いつぶれが観察できる。33は磨り面が明瞭ではないが、形態や石材等から磨石と推定した。

E. まとめ

今回の調査では製品（ツール）は挟入石器1点のみで、時期を特定する手がかりとなる石器は得られなかった。しかし、石器139点のうち、約3割に当たる44点が接合した資料で占められている。これらは石器製作がこの場でおこなわれたことを示しており、自然面が残る資料が多いことから、石材産地から採取した母岩を持ち込んだものと推定できる。しかし、良質な石材は少なく、剥離の過程で、節理面で偶発的に割れてしまう場合が多かったと考えられる。石材ではチャートと凝灰岩を多用し、町内の遺跡で出土例の多い黒曜石は使わず、また、無斑晶質安山岩の使用割合も少ないことから、特異な石器石材の構成である。異なる層準の石器が接合する例が多い点も特異である。現場で地層の乱れは観察できなかったことから、このような地層間の遺物の移動がどのようにおこるのか、今後の大きな検討課題と思われる。また、このことは、出土層準の違いを時期差とし、同じ遺跡内でいくつかの文化層を設定するというやり方に対し、再考を促す事例といえよう。遺物がこれだけ大きく動く場合があるという事実から、単純に出土層準が違うということで石器群を分け、文化層を複数設定するのではなく、石器組成や石材組成、剥片剥離技術などを総合的に捉えて、慎重に検討し、文化層を設定する必要がある。

今回出土した石器は、Ⅲ層～Ⅶ層にかけて出土しているが、これらは同一時期の石器群とした。この石器群の時期についてであるが、層準からは突出したピークはないものの、概ねⅤ層～Ⅵ層に遺物が多く出土している。剥片の剥離技術は、大形の石核では単剥離面打面を加撃して幅広の剥片を連続して剥離する例が見られ、小形の石核では表裏で交互に打面を入れ替えて、幅広の剥片を剥離する技術が見られた。石刃技法は見られない。こうした例は清明台遺跡（2006個人住宅地点）で見られ（信濃町教育委員会，2007a）、その時期はAT降灰直後の上Ⅱ下部文化層（野尻湖人類考古グループ，1994）としている。大道下遺跡ではⅥ層に相当する層である。今回の調査では時期を特定する手がかりに乏しいが、清明台遺跡の事例との比較と、遺物が多く出土している層準とい

うことから、生活面はVI層にあったと結論付け、上II下部文化層、野尻湖第Ⅲ期（谷，2007）、南関東のV～Ⅳ層下部に対比しておきたい。

18. 御料遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字平岡字裏屋敷添1635-5
原因	個人住宅建設
調査方法	工事立会
調査面積	150㎡（工事面積）
調査期間	平成19年5月18日
出土遺物点数	0点

B. 遺跡の環境と調査に至る経緯、調査の結果

御料遺跡は御料の集落全体にわたる縄文時代と平安時代の遺跡である（信濃町教育委員会，2003）が、これまでに発掘調査が実施されておらず、詳細は不明である。

この御料遺跡内で個人住宅の建設が計画された（図39）。計画は既存の建物を解体した後、ほぼ同じ位置に建設するというものであった。既存建物の基礎工事及びその撤去によって大きく改変され、遺跡が残されていない可能性が高いと判断されたため、工事立会とし、状況の確認をおこなって終了した。

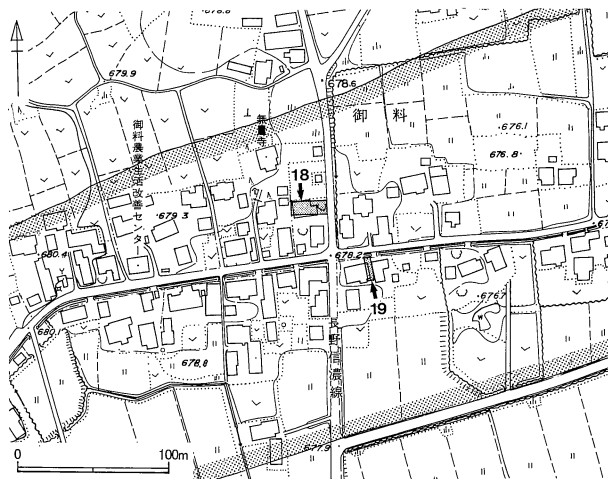


図39 御料遺跡の範囲と調査地の位置

19. 御料遺跡

A. 概要

所在地	信濃町大字平岡字前屋敷添1565-1
原因	個人住宅建設
調査方法	工事立会
調査面積	72㎡（工事面積）
調査期間	平成19年4月19日
出土遺物点数	0点

B. 調査に至る経緯と調査結果

御料遺跡内で個人住宅の建設が計画された（図39）ため、現地を確認したところ、かつて倉庫が建っていて、それを撤去した場所へ建設するというので、すでに基礎の撤去等によって大きく改変されている状況を確認した。遺跡が残されていない可能性が高いと判断されたため、工事立会とし、状況の確認をおこなって終了した。

文献

- 柏原町区誌編纂委員会 1988 『柏原町区誌』
- 信濃町教育委員会 1994 『丸谷地遺跡・大道下遺跡発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 1995 『貫ノ木遺跡・日向林B遺跡（個人住宅地点）発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 1996 『上ノ原遺跡（4次）ほか発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 1997 『大道下遺跡（4次）ほか信濃町内遺跡発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 1999 『大久保南遺跡（4次）ほか発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 2000 『仲町遺跡（個人住宅地点）ほか発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 2002a 『仲町遺跡 一里塚遺跡』
- 信濃町教育委員会 2002b 『照月台遺跡発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 2003 『信濃町の遺跡分布図』
- 信濃町教育委員会 2004a 『東裏遺跡 東裏団地地点・町道柴山線地点発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 2004b 『上山桑A遺跡発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 2005 『平成16年度町内遺跡発掘調査報告書—杉久保遺跡ほか—』
- 信濃町教育委員会 2007a 『平成18年度町内遺跡発掘調査報告書—清明台遺跡ほか—』
- 信濃町教育委員会 2007b 『上ノ原遺跡・東裏遺跡・裏ノ山遺跡』

- 谷和隆 2007 「野尻湖遺跡群における先土器時代石器群の変遷」『長野県立歴史館研究紀要 第13号』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000a 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 —信濃町内その1— 裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000b 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 —信濃町内その1— 貫ノ木遺跡・西岡A遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000c 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16 —信濃町内その2— 縄文時代～近世編』
- 長野県埋蔵文化財センター 2004 『一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書2 信濃町内その2 貫ノ木遺跡・照月台遺跡』
- 中村由克 1992a 「速報 長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構（Ⅰ）」『考古学ジャーナル No. 342』
- 中村由克 1992b 「速報 長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構（Ⅱ）」『考古学ジャーナル No. 344』
- 野尻湖人類考古グループ 1987 「野尻湖遺跡群の旧石器・縄文草創期文化」『専報第32号 野尻湖の発掘4（1984-1986）』
- 野尻湖人類考古グループ 1990 「野尻湖遺跡群の旧石器・縄文草創期文化2」『専報第37号 野尻湖の発掘5（1987-1989）』
- 野尻湖人類考古グループ 1994 「野尻湖遺跡群における文化層と旧石器文化」『野尻湖博物館研究報告第2号』
- 渡辺哲也 1996 「信濃町大久保南遺跡の調査」『第8回長野県旧石器文化研究交流会—発表資料—』
- 渡辺哲也・中村由克 1992 「信濃町貫ノ木遺跡の調査」『第5回長野県旧石器文化研究交流会—発表要旨—』



1. 大久保南遺跡 TP-6 の調査の様子① (遠景, 東から)



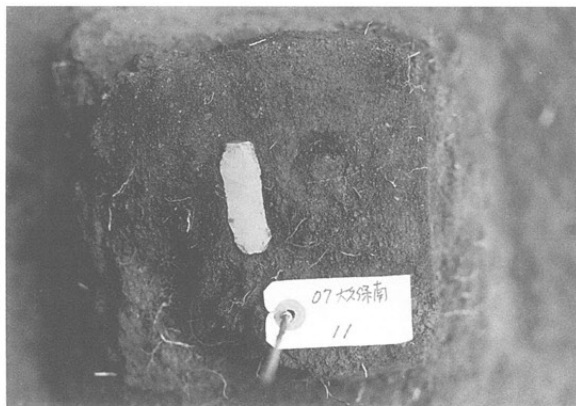
2. 大久保南遺跡 TP-6 の調査の様子② (近景, 北から)



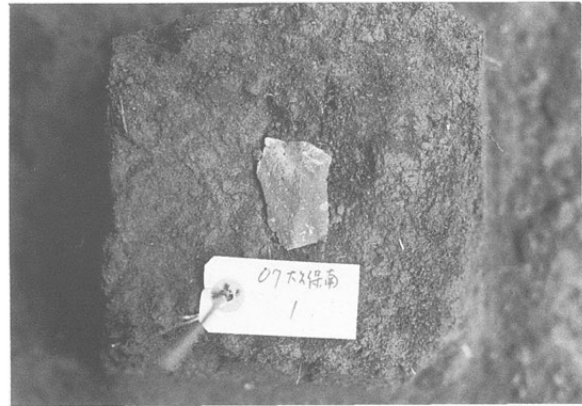
3. 大久保南遺跡 TP-6 北側の遺物の出土状況 (南から)



4. 大久保南遺跡 TP-6 南側の遺物の出土状況 (東から)



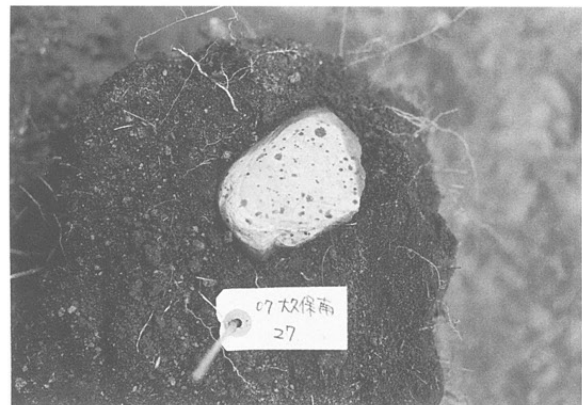
5. 大久保南遺跡 二次加工のある石刃 (図番号1) の出土状況



6. 大久保南遺跡 剥片 (図番号5) の出土状況



7. 大久保南遺跡 剥片 (図番号8) の出土状況



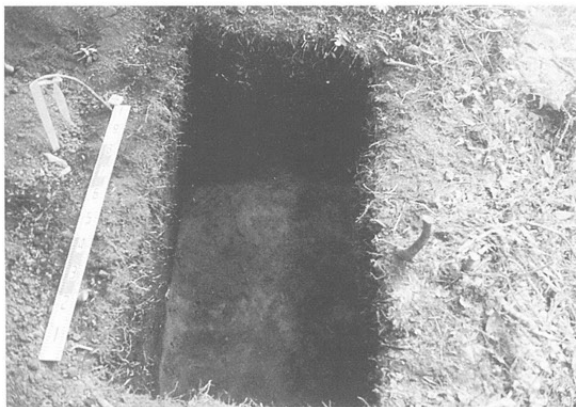
8. 大久保南遺跡 石核 (図番号9) の出土状況



1. 大久保南遺跡 巨礫 (14) の出土状況



2. 大久保南遺跡 TP-6 の礫群の出土状況 (東から)



3. 大久保南遺跡 TP-4 の完掘状況 (北西から)



4. 大久保南遺跡 TP-5 の完掘状況 (北から)



5. 緑ヶ丘遺跡 調査の様子① (遠景, 南西から)



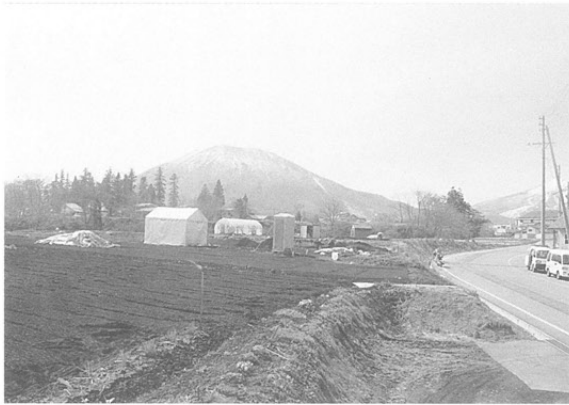
6. 緑ヶ丘遺跡 調査の様子② (近景, 北東から)



7. 東裏遺跡・個人住宅地点 調査の様子① (遠景, 北西から)



8. 東裏遺跡・個人住宅地点 調査の様子② (近景, 西から)



1. 東裏遺跡・医師住宅地点 調査地の様子 (南東から)



2. 東裏遺跡・医師住宅地点 調査の様子① (遠景, 南西から)



3. 東裏遺跡・医師住宅地点 調査の様子② (近景, 東から)



4. 東裏遺跡・医師住宅地点 TP-3の遺物の出土状況 (南西から)



5. 東裏遺跡・医師住宅地点 TP-4の遺物の出土状況 (北西から)



6. 東裏遺跡・医師住宅地点 縄文土器 (図番号6) の出土状況



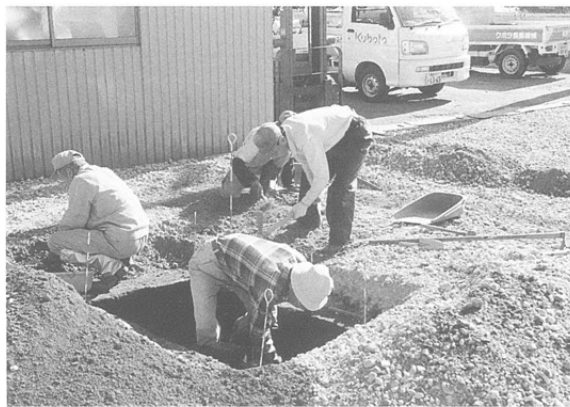
7. 東裏遺跡・医師住宅地点 縄文土器 (図番号5) の出土状況



8. 東裏遺跡・医師住宅地点 縄文土器 (図番号16) の出土状況



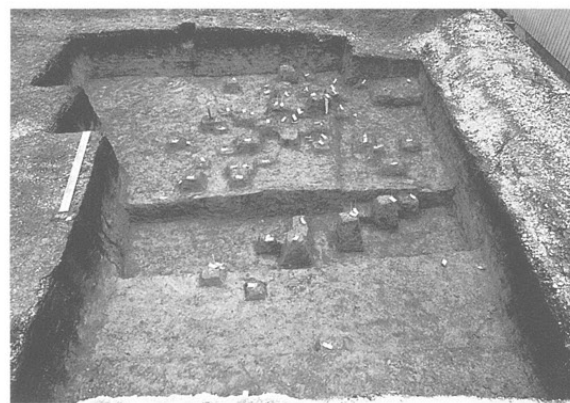
1. 大道下遺跡 調査の様子 (遠景, 東から)



2. 大道下遺跡 TP-8の調査の様子① (北東から)



3. 大道下遺跡 TP-8の調査の様子② (北東から)



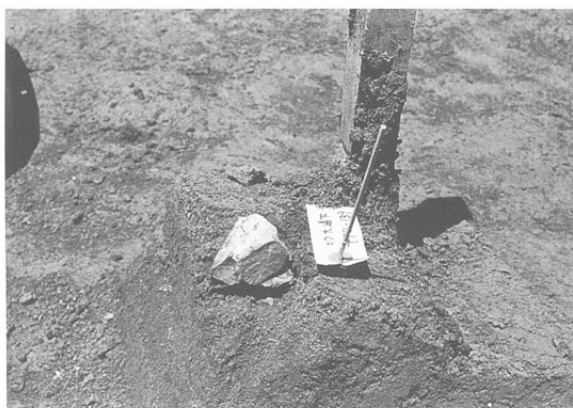
4. 大道下遺跡 TP-8の遺物の出土状況① (遠景, 西から)



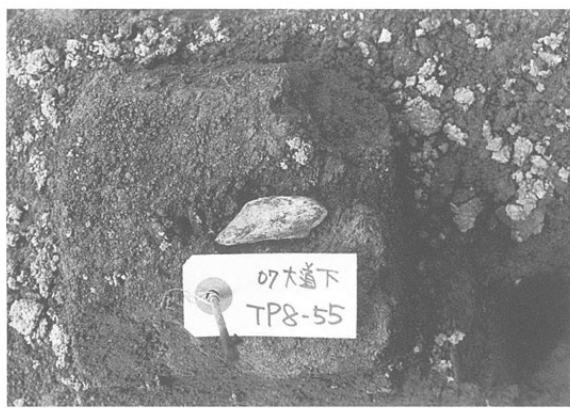
5. 大道下遺跡 TP-8の遺物の出土状況② (遠景, 東から)



6. 大道下遺跡 TP-8の遺物の出土状況③ (近景, 東から)



7. 大道下遺跡 石核 (図番号28-B) の出土状況



8. 大道下遺跡 剥片 (図番号28-A) の出土状況



1. 大道下遺跡 石核 (図番号29-C) の出土状況



2. 大道下遺跡 剥片 (図番号29-D) の出土状況



3. 大道下遺跡 石核 (図番号31-C, D) の出土状況



4. 大道下遺跡 剥片 (図番号31-A) の出土状況



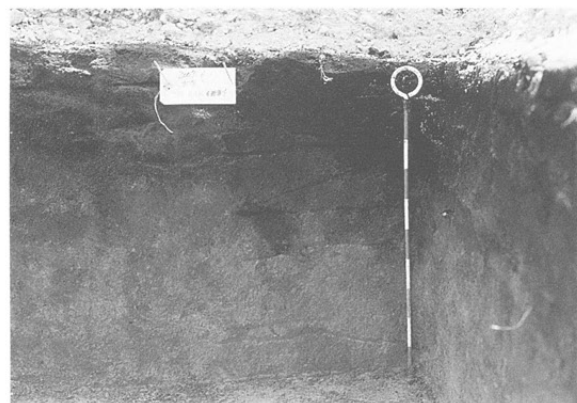
5. 大道下遺跡 石核 (図番号30-C) の出土状況



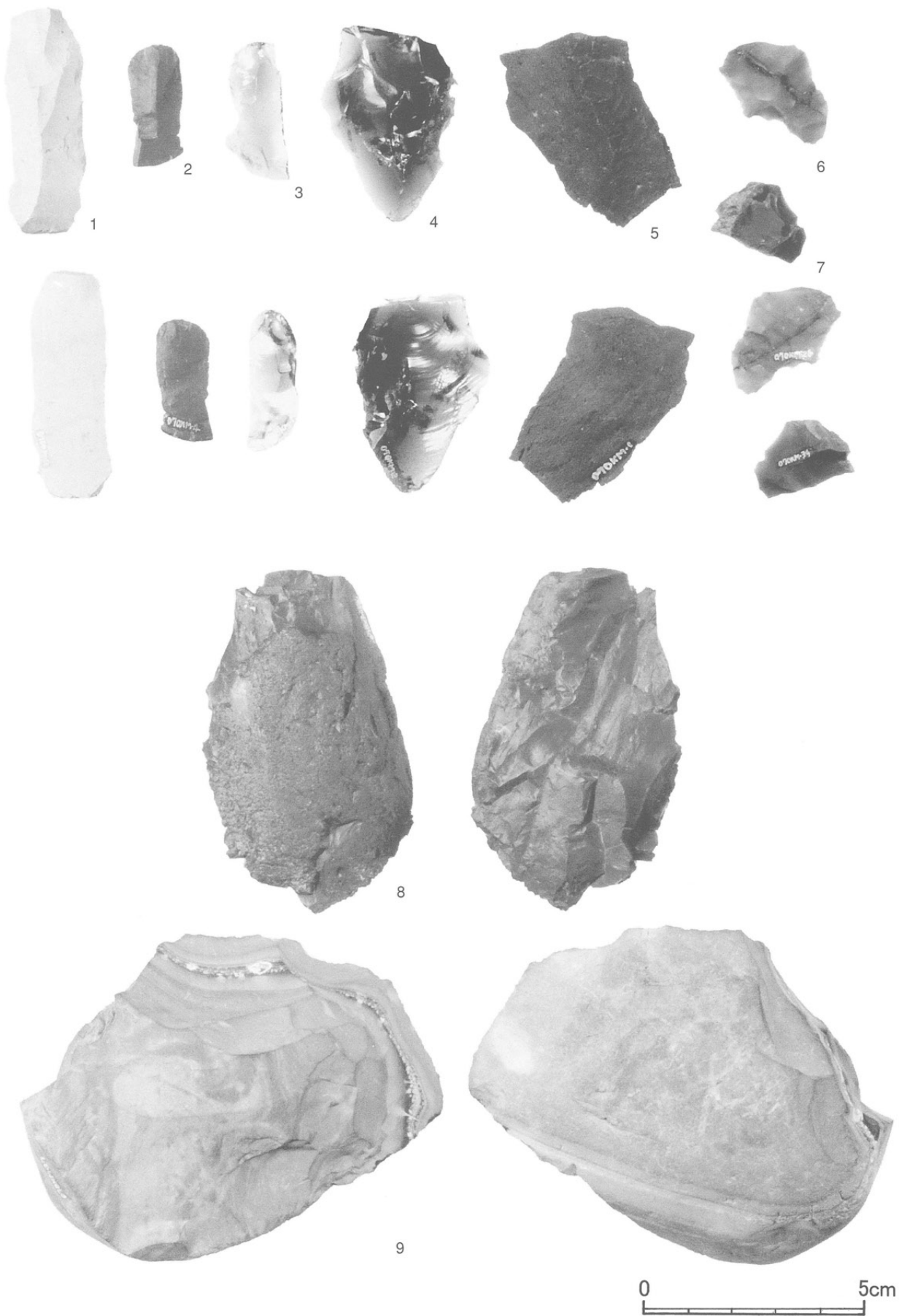
6. 大道下遺跡 敲石 (図番号32) の出土状況



7. 大道下遺跡 磨石 (図番号33) の出土状況



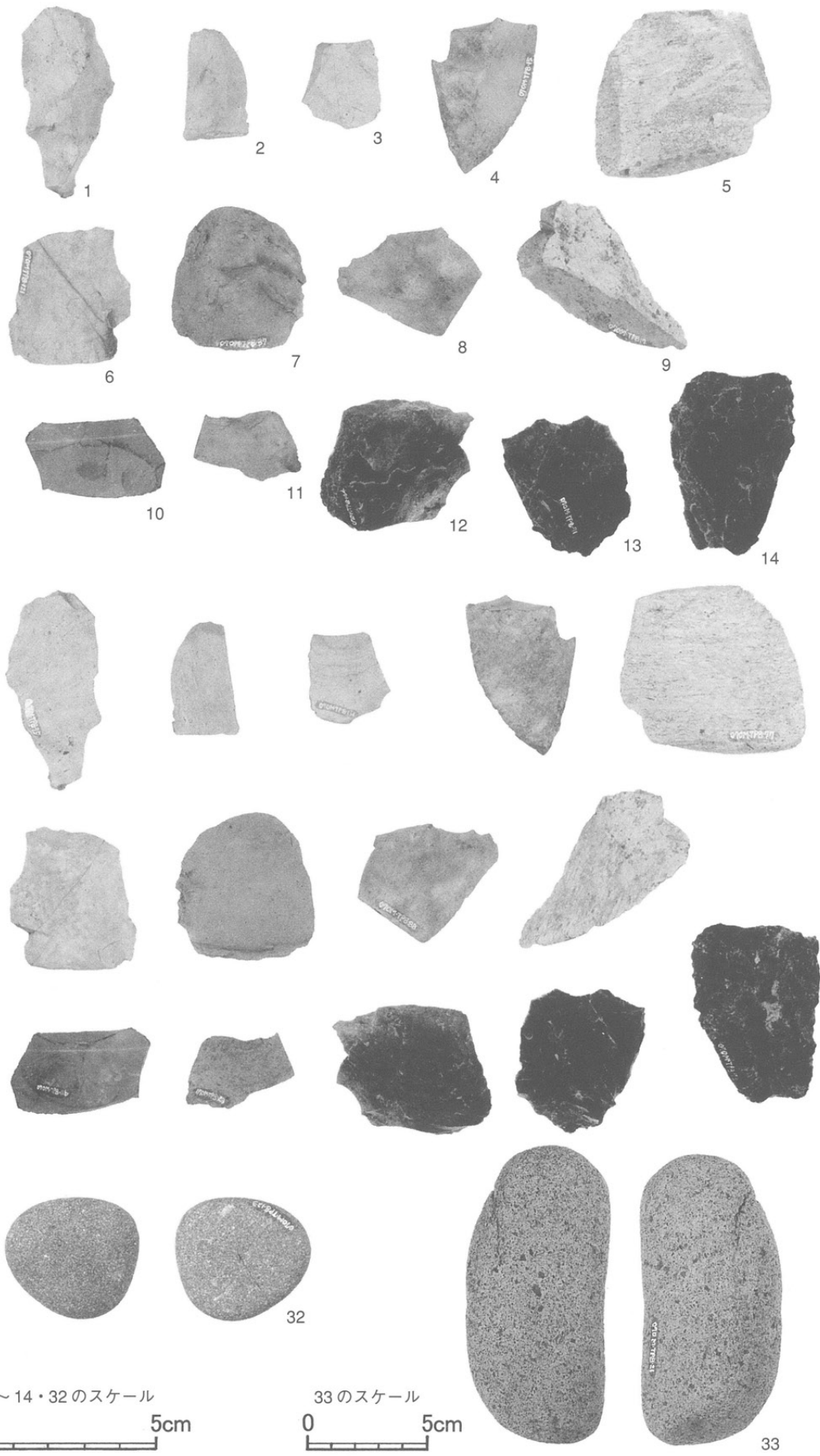
8. 大道下遺跡 土層



大久保南遺跡の主な出土遺物



東裏遺跡・医師住宅地点の主な出土遺物



大道下遺跡の主な出土遺物

報告書抄録

書名	平成19年度町内遺跡発掘調査報告書								
副書名	大道下遺跡ほか								
シリーズ名	信濃町の埋蔵文化財								
シリーズ番号									
編著者名	渡辺哲也								
編集機関	信濃町教育委員会								
所在地	〒389-1305 長野県上水内郡信濃町柏原428-2 TEL: 026-255-5923								
発行年月日	2008年(平成20年)3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
	市町村	遺跡番号							
おおくほみなみ 大久保南 (2007県道改良地点)	ながの けんかみ み のちぐんしな の まち おおあざかしわばら 長野県上水内郡信濃町 大字 柏原 あざうえのほら 字上ノ原216-1, 841-1, 854-1		205834	61	36度 49分 2秒	138度 12分 6秒	20070904 ～ 20070912	18.7	県道拡幅 工事
みどりがおか 緑ヶ丘 (2007個人住宅地点)	ながの けんかみ み のちぐんしな の まち おおあざかしわばら 長野県上水内郡信濃町 大字 柏原 あざこまるやま 字小丸山2528-11		205834	66	36度 48分 40秒	138度 11分 33秒	20070903	6	個人住宅 建設
ひがしうら 東裏 (2007個人住宅地点)	ながの けんかみ み のちぐんしな の まち おおあざかしわばら 長野県上水内郡信濃町 大字 柏原 あざひがしうら 字東裏481-1		205834	70	36度 48分 18秒	138度 12分 36秒	20071107	9.6	個人住宅 建設
ひがしうら 東裏 (2007医師住宅地点)	ながの けんかみ み のちぐんしな の まち おおあざかしわばら 長野県上水内郡信濃町 大字 柏原 あざひがしうら 字東裏464-7		205834	70	36度 48分 15秒	138度 12分 35秒	20070425 ～ 20070507	37.2	個人住宅 建設
おおみちした 大道下 (2007工場・店舗地点)	ながの けんかみ み のちぐんしな の まち おおあざほなみ 長野県上水内郡信濃町 大字穂波 1967-1		205834	146	36度 47分 12秒	138度 13分 4秒	20070523 ～ 20070604	29	工場・ 店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
大久保南 (2007県道改良地点)	散布地	旧石器時代	礫群 1基	石核・剥片など 41点		石刃石器群が出土。			
緑ヶ丘 (2007個人住宅地点)	散布地	縄文時代 平安時代		出土品なし					
東裏 (2007個人住宅地点)	散布地	縄文時代 平安時代		出土品なし					
東裏 (2007医師住宅地点)	散布地	縄文時代 平安時代		縄文土器など 68点		縄文時代早期の沈線文系土器群 が出土。			
大道下 (2007工場・店舗地点)	散布地	旧石器時代		石核・剥片など 156点		多数の接合資料が出土。石器製 作址と推定。			

平成19年度町内遺跡発掘調査報告書

—大道下遺跡ほか—

発行 平成20年(2008)3月31日
 発行者 信濃町教育委員会
 〒389-1305
 長野県上水内郡信濃町大字柏原428-2
 TEL 026-255-5923
 印刷 信毎書籍印刷株式会社
 〒381-0037
 長野県長野市西和田1丁目30番3号
 TEL 026-243-2105

2 0 0 8

Shinano-machi Board of Education,
Kamiminochi-gun, Nagano, 389-1305 Japan.